



PG-3012

K7216

1920

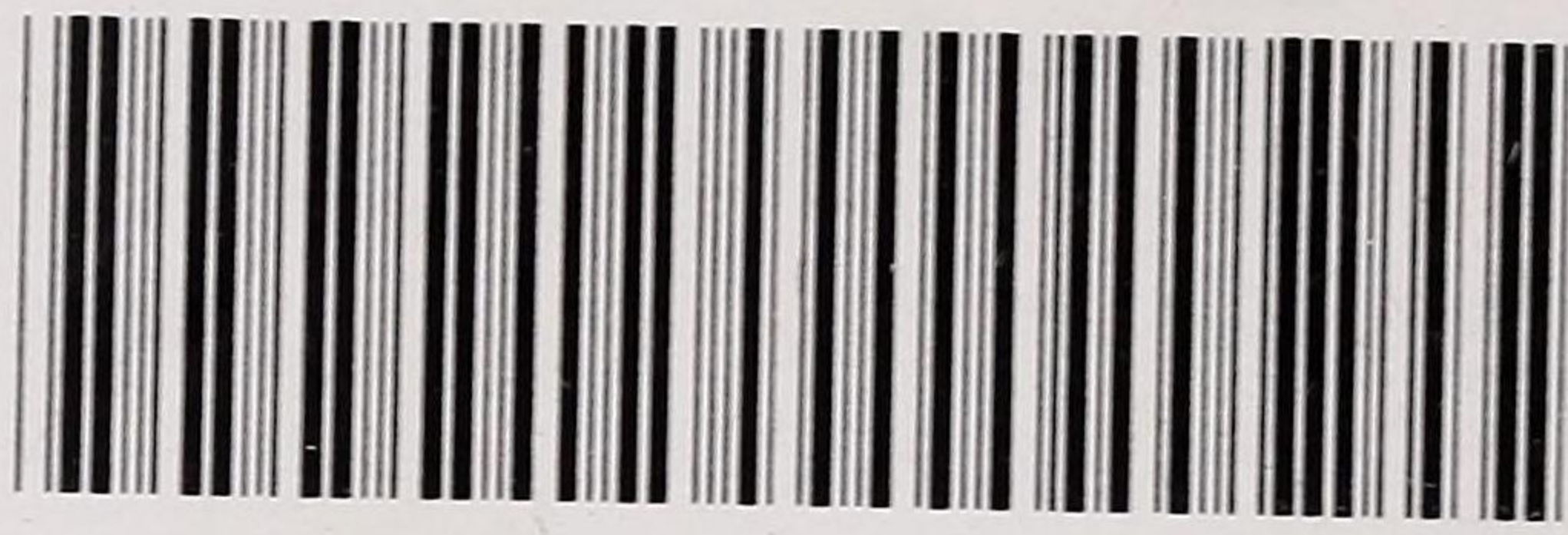
Copy 1

Asian

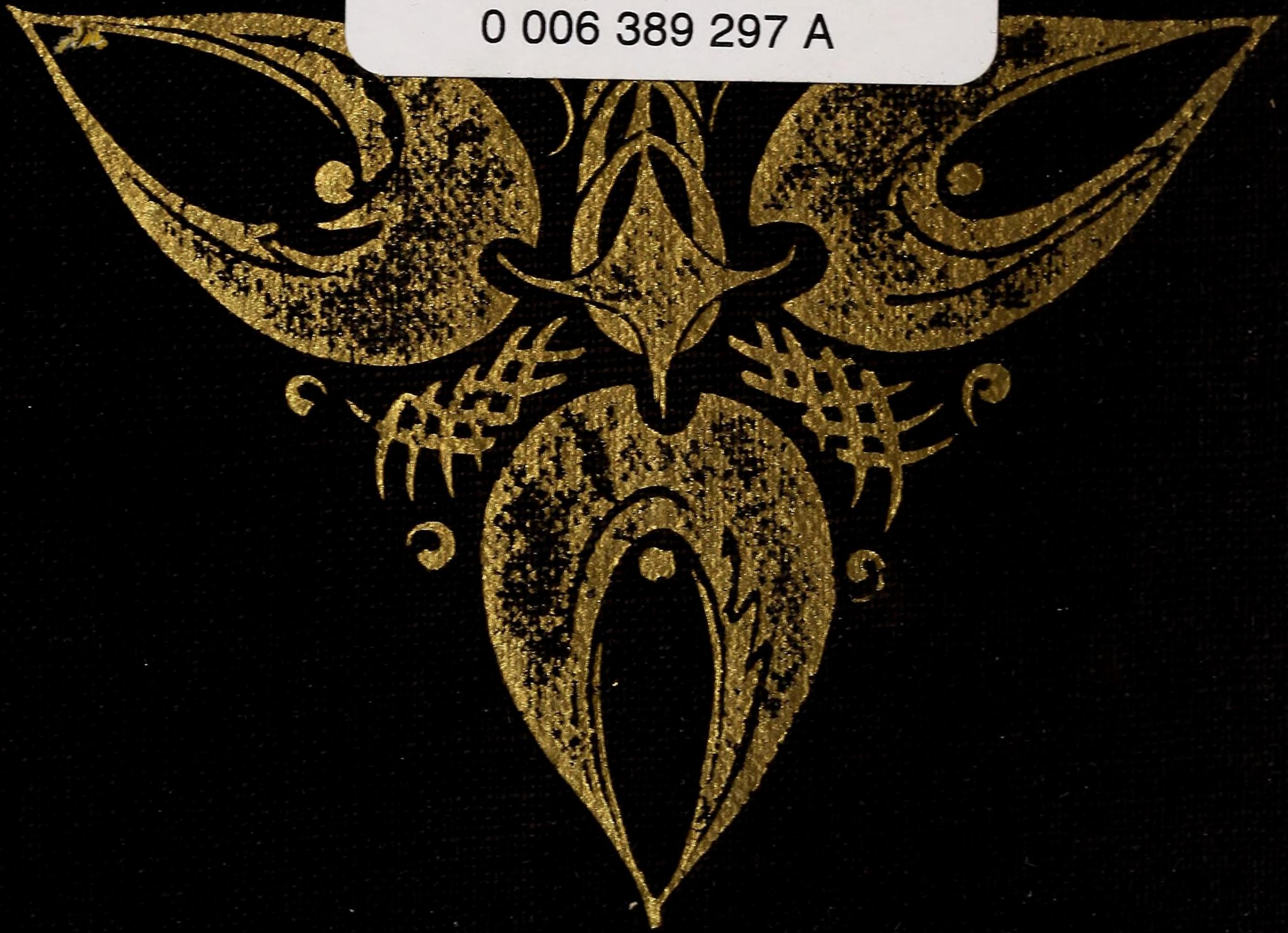
Japan

Cage

LIBRARY OF CONGRESS



0 006 389 297 A



ISSEIDO & CO.
BOOK DEPARTMENT
TOKYO

絕
後

可

結

成

此

行

Kropotkin, Petr Alekseevich



馬場孤蝶
森下岩太郎
佐藤綠葉
共譯

クロポ
トキン
露西亞文學講話

東京
ア
ルス
發行

PG 3012

• K7216

1920

Copy 1

Asian

Japan

Case

LC Control Number



00 505962

序

此書は露西亞の大思想家ピイタア・クロポトキン著の *Ideals and Realities in Russian Literature* の千九百〇五年版を全譯したものである。

原著は、クロポトキンが米國ボストン市のロオウエル協會でなした八回の講演を取り纏めたものだから、始めから英文で書かれたものである。露文學に關する良書としては、大抵獨逸とか佛蘭西の原書を英譯したものが、日本へ傳はつて居るのであるので、クロポトキンの此の書の如き始めから英文で書かれたものは甚だ少いのである。尙その上に、露西亞人が英文で露國文學史を書いたものと云つては、此書の外には一つも無いと思ふ。先づ此の點に於て、邦譯無かるべからざる書である。

露西亞の近代文學は人生の爲めの文學だと稱せられ、その優れたる文學者等の筆になれる諸作に人道的情操の顯著であることは、今日廣知の事實である。本書の原著者クロポトキンは大思想家として、歐洲の思想界に深大の影響を與へた人である、他面に於ては人道の戰士である。クロポトキンは本書の中に於て、人生の爲めの藝術といふ立ち場から、露西亞の近代文學に就いて、極めて精到なる而して極めて剴切なる解析を加へて居る。此點に於ても亦邦譯無かるべからざる書である。

讀者若し此邦譯に依つて、露西亞文學の眞髓を味はると共に、尙進んで、此書から吾邦の文學の將來に關して暗示を得られるやうであつたら、譯者の望は足るのである。

千九百二十一年初夏

譯者識

譯者識
此書は露西亞文學の眞髓を味はると共に、尙進んで、此書から吾邦の文學の將來に關して暗示を得られるやうであつたら、譯者の望は足るのである。

刊

緒言

本書は一千九百零一年三月中、予がボストン市ロウオエル學院に於て、十九世紀の露西亞文學に就てなせる聯續八回の講義を基礎として成つたものである。

この講演をなさんがために、同學院の招待を承諾した時、予は十分に予の前途に横はる困難を認知した。或る一國の文學、殊に其文學が殆ど聽衆または讀者に知られてゐない場合に、それに就て語りまたは書くのは、決して容易の業では無い。僅に三人乃至四人ほどの露國作家が、正當にまたは如何程か完全に英譯されてゐるばかりである。それ故に予は、單に其一二行を讀んだだけでも、それが直ちに其作の特徴をあらはしてゐると思つた場合には、予は屢々一つの詩或は一つの小説に就て語らざるを得無かつた。

併しながら、困難が大であるとしても、此仕事は十分努力甲斐のあるものである。露西亞文學は創意ある詩想に富める鑛坑である。それは古い文學の中には同様の程度に於ては見出す事の出來ぬ清新さと若々しさを持つてゐる。その上にそれは表現の摯實と簡素とを持つてゐる。それらのものは文學上の技巧に倦んだものゝ心にとつて、遙に大なる引力を有するのである。それから露西亞文學は次のやうな著し

い特相を持つてゐる。それは藝術の領域へ——詩や、小説や、ドラマの中へ——社會問題や、政治問題や、それ等のものは歐羅巴や亞米利加では、少くとも現代では、主として政治的記事として論ぜられて文學上には稀にしかあらはれぬものであるが、殆どそれらのすべての問題を運び入れてゐる。

他の國にあつては、如何なる國と雖も、文學が露國に於けるが如く勢力ある地位を占めてゐる國は無い。何處にも文學がそれ程深く、それ程直接の影響を、次代のジエネレーションの智的發達の上に及ぼしてゐるところは無い。ツルゲエネフの小説の如き、或は一層無名の作家の作品でさへも、過去五十年間、露國青年の發展上に眞の飛石となつて來たのである。

何故に露西亞にては文學がかほどまでの勢力を及ぼして來たのであるか、それは自明の理である。そこには公開された政治的・生活的生活が無い。農奴制廢止當時に於ける數年間を除いては、露西亞の民衆は決して自國諸制度の構成上に實際の役割を演ずべく許されなかつたのである。

その結果、同國の優れたる人々は、彼等のアスピレーション、彼等の國民生活の觀念、彼等の理想等を表現する仲介物として、詩や、小説や、諷刺物語や、または文學批評を選ぶに至つたのである。露國に於て、同國の政治的、經濟的、乃至社會的理想——露國の社會に於ける歴史形成界のアスピレーションを諒解せんとならば、それはブリウブツクヤ、新聞の論説を見ても駄目であつて、實に藝術上の作品

に行かねばならぬ。

限られたる本書に於て、廣く露西亞文學全體を講述するのは不可能であるから、予は予の重なる注意を近代文學の上に集注した。初期の作家、プウシキン及びゴオゴリに至るまでの——近代文學の建設者——に就ては、簡単に緒論的にスケッチして置いた。詩、小説、劇、政治文學、及び文藝批評の最も代表的な作家に就て、その次に考察した。それから、それらの作家をめぐつて、私は稍々程度の落ちる作家を一まとめにした。それらの作家に就て最も大切な事は簡単なノートの中に述べて置いた。之等の小作家の一人一人も、何かしら個性あるものをあらはし、または十分知らるゝに値ひするものゝある事は予も十分に知つてゐる。またそれらの人々の或る者は、屢々有名なる作家よりも、或る一つの思想の流れをよりよく代表する點に於て成功してゐる場合もある。併し僅に露西亞文學の廣い一般的觀念を與へんと企劃したに過ぎぬ書物に於ては、私の執つたやうなプランが必要であつた。

文藝批評は露國に於ては常によく言ひあらはされてゐる。而して本書に於て採用した意見は、吾が國の大批評論家——ビエリインスキイ、チエルニイシエーフスキイ、ドブロリユーボフ、ビイサレフ、及び彼等の近代後繼者、即ちミハイロオフスキイ、アルセエニエフ、スカビヨチエーフスキイ、ヴェンゲエロフ、其他の人々の作物の痕跡を何うしても帶びざるを得ないのである。現代作家の傳記的材料に就

ては、予は最後に其名を挙げた作家（ヴエゲエンロフ）の近代露西亞文學に關する名著、及び八十卷の嘆稱すべき露國百科辭書に負ふところが多かつた。

予はこの機會に於て、親切にも、本書を原稿に於ても、校正の際にも、嚴密に讀んでくれた予の老友リチャード・ヒース君に對して、予の心からの感謝を捧げる。

ケント縣、ブラムレーにて。

一千九百零五年一月。

目次

緒言

第一章 露西亞語

露西亞語——古代民俗文學、民俗物語——詩歌——古話——イゴオル侵入の叙事詩——
 年代記——蒙古人入寇と其結果——ジョン四世とクウルビスキイとの通信——教會の分
 裂——アヴァクウムの記録——十八世紀——ペエトル一世及び其時代——トレチアコオ
 フスキイ——ロモノオソフ——スマロオコフ——カザリン二世の時代——デルジャアヴ
 イン——フオン・ウイージン——共濟組合員、ノオヴイコフ——ラヂイシエフ——十九
 世紀の始、カラムジインとジユコオフスキイ——十二月黨——リリイエフ。

第二章 プウシキン——レエルモントフ

プウシキン、形式の美——プウシキンとシラ——彼の青年時代、流刑、晩年の經歷及び死——お伽噺——ルスラアンとルドミイラ——彼の抒情詩——『バイロニズム』——劇——イフゲエニイ・オニエギン——レエルモントフ——プウシキンカレエルモントフ——彼の生涯——コウカサス——自然の詩——シエレーの影響——悪魔——ムチイリ——自由に對する愛——彼の死——散文家としてのプウシキン及びレエルモントフ——同時代の他の詩人及び小説家。

第三章 ゴオゴリ

小露西亞——『デイカアンカ近郊農園の夜』及び『ミルゴロツド』——田園生活と滑稽——『イワン・イワアノウイチとイワン・ニキイフオリツチの爭論』——歴史小説、『タラアス・ブウルバ』——『外套』——劇、『檢察官』——其影響——『死靈魂』、主なる型——露國小説に於ける寫實主義。

第四章 ツルゲエネフ——トルストイ

ツルゲエネフ——彼の藝術の主要なる特色——『獵人日記』——初期の小説の厭世主義——露西亞社會の主要なる典型を描ける連続的小説——ルウデン——ラヴレエトスキイ——ヘレンとインサアロフ——バザアロフ——何故に『父と子』は誤解されたか——『ハムレット』とドン・キホーテ——『處女地』——人民に對する運動——散文詩——トルストイ——『幼年時代』及び『少年時代』——クリミヤ戰爭時代及び戦後——『青年時代』、理想の追求——短篇——『コサツク』——教育事業——『戰爭と平和』——『アンナ・カレエニナ』——宗教上の危機——基督教義に對する彼の解釋——基督教倫理の主要點——藝術上の近作——『クロイツェル・ソナタ』——『復活』。

第五章

ゴンチャロフ——ドストイエフスキイ——ネクラア

ソフ

ゴンチャロフ——『オブロオモフ』——露西亞人のオブロオモフ病——それは露西亞人の獨占的疾患か?——『斷崖』——ドストイエフスキイ——彼の處女作——彼の作物の一般

的特質——『死人の家』——『虐げられたる人々』——『罪と罰』——『カラマアゾフ兄弟』——
 —ネクラアソフ——彼の才能に就ての議論——人民に對する彼の愛——婦人の聖視——
 同時代の他の散文作家——セルゲエイ・アクサアコフ——ダルー——イワン・パネエエフ——
 —フヴオスチンスカヤ(匿名ヴイ・クレストフスキオイ)——同時代の詩人——コルツオ
 フ——ニキチン——プレスチエエフ、純藝術の嘆美者、チュチエフ——エ・マアイコフシ
 チエルビナ——ポロンスキイ——エ・フエト——エ・ケエ・トルストイ——翻譯家。

第六章 戯曲

戯曲の起原——アレキセイ皇帝とペエトル一世——スマロオコフ——擬古古典的悲劇、
 クニヤアジニイン・オゼロフ——最初の喜劇——十九世紀の初頭——グリボエエドフ——
 —五十年代の莫斯科の劇壇——オストロオフスキイ、その最初の戯曲——『雷雨』——オ
 フトロオフスキイの後年の戯曲——史劇、エ・ケエ・トルストイ——其他の劇作家。

第七章 民衆作家

露西亞文學に於ける彼等の位置——初期の民衆作家。グリゴロオヴィチ——マアルコ・ボフチヨク——ダニリエーフスキイ——中間の時期。コオコレフ——ビイセムスキイ——ポチエーヒン——人種學的探究——寫實派。ポミヤロオフスキイ——リエシエートニコフ——レヴィートフ——グレブ・ウスピイエンスキイ——ズラトヴラアツキイと他の民衆作家——ナウーモフ——ザソオデイムスキイ——サアロフ——ネフエードフ——近代寫實主義。マクシイム・ゴオルキイ。

第八章 政治文學、諷刺、藝術批評、現代小説家

……………四二

政治文學——檢閱官の壓迫——結社——歐化主義者と國粹主義者——外國に於ての政治文學。ヘエルツエン——ガリヨオフ——バクウニン——ラヴロオフ——ステプニアク——『現代』とチエルニイ、エフスキイ——諷刺。シチエドリ(サルチイコフ)——藝術批評。露西亞に於けるその意義——ビエリインスキイ——ドブロリユーボフ——ビイサレフ——ミハイロオフスキイ——トルストイの『藝術とは何ぞや?』——現代小説家。オエルテル——コロオレエンコ——現下文壇の潮流——メレジュコオフスキイ——ボボリ

的特質——『死人の家』——『虐げられたる人々』——『罪と罰』——『カラマアゾフ兄弟』——
 —ネクラアゾフ——彼の才能に就ての議論——人民に對する彼の愛——婦人の聖視——
 同時代の他の散文作家——セルゲエイ・アクサアコフ——ダルー——イワン・パネエエフ——
 —フヴオスチンスカヤ(匿名ヴイ・クレストフスキオイ)——同時代の詩人——コルツオ
 フ——ニキチン——プレスチエエフ、純藝術の嘆美者、チュチエフ——エ・マアイコフシ
 チエルビナ——ポロンスキイ——エ・フエト——エ・ケエ・トルストイ——翻譯家。

第六章 戯曲

戯曲の起原——アレキセイ皇帝とペートル一世——スマロオコフ——擬古古典的悲劇、
 クニヤアジニイン・オゼロフ——最初の喜劇——十九世紀の初頭——グリボエエドフ——
 —五十年代の莫斯科の劇壇——オストロオフスキイ、その最初の戯曲——『雷雨』——オ
 フトロオフスキイの後年の戯曲——史劇、エ・ケエ・トルストイ——其他の劇作家。

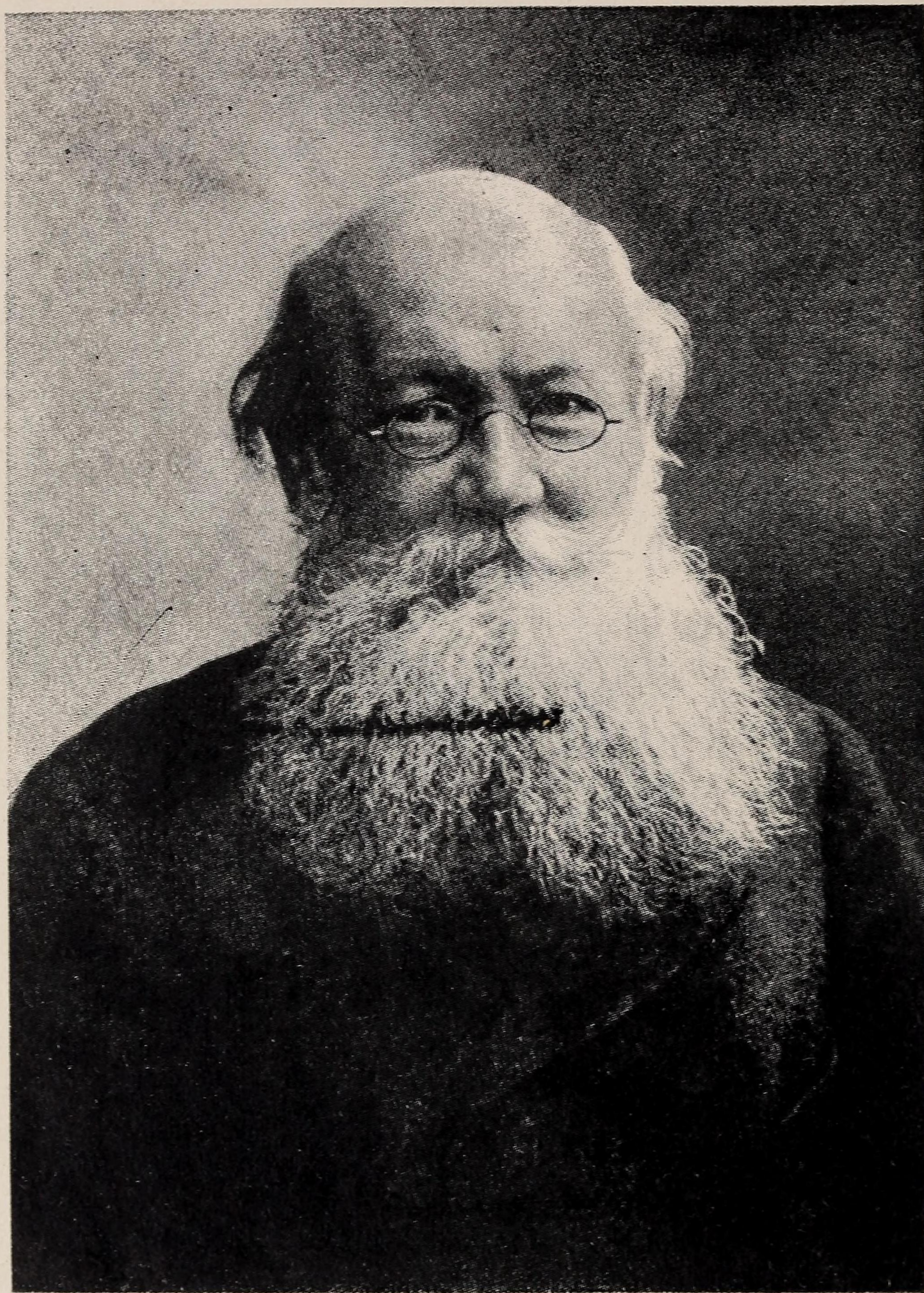
第七章 民衆作家

露西亞文學に於ける彼等の位置——初期の民衆作家。グリゴロオヴイチ——マアルコ・ボフチヨク——ダニリエーフスキイ——中間の時期。コオコレフ——ビイセムスキイ——ポチエーヒン——人種學的探究——寫實派。ポミヤロオフスキイ——リエシエートニコフ——レヴィートフ——グレブ・ウスピイエンスキイ——ズラトヴラアツキイと他の民衆作家——ナウーモフ——ザソオデイムスキイ——サアロフ——ネフエードフ——近代寫實主義。マクシイム・ゴオルキイ。

第八章 政治文學、諷刺、藝術批評、現代小説家

……………四二

政治文學——檢閲官の壓迫——結社——歐化主義者と國粹主義者——外國に於ての政治文學。ヘエルツエン——ガリヨオフ——バクウニ——ラヴロオフ——ステプニアク——『現代』とチエルニイ、エフスキイ——諷刺。シチエドリソ(サルチイコフ)——藝術批評。露西亞に於けるその意義——ビエリインスキイ——ドブロリユーボフ——ビイサレフ——ミハイロオフスキイ——トルストイの『藝術とは何ぞや?』——現代小説家。オエルテル——コロオレエンコ——現下文壇の潮流——メレジユコオフスキイ——ボボリ



KROPOTKIN

第一章 露西亞語

第一章 國語

露西亞語

露西亞語——古代民俗文學、民俗物語——詩歌——古話——イゴオル侵入の叙事詩——年代記——蒙古人入寇と其結果——ジョン四世とクウルビスキイとの通信——教會の分裂——アヴァクウムの記録——十八世紀ベエトル一世及び其時代——トレチアコオフスキイ——ロモノオソフ——スマロオコフ——カザリン二世の時代——デルジャアヴイン——フオン・ウイージン——共済組合員、ノオヴイコフ——ラヂイシエフ——十九世紀の始、カラムジインとジユコオフスキイ——十二月黨——サリイエフ。

ツルゲエネフが其臨終の床から露西亞の文學者等に殘した遺言の一つは、願くは『吾々の貴き遺産なる露西亞語』を純粹のまゝ保て、と云ふ事であつた。西歐にて話される重なる諸國語を完全に知つてゐる彼は、すべての表白し得る思想や感情の色合を發表する機關として、露西亞語に關する最高の意見を持つてゐた。さうして彼は如何なる表現の深さと力とが、また如何なる散文に於ける諧調が、其自國語にて得られるかと云ふ事を、其著作に於てあらはした。露西亞語を高く評價する點に於て、ツルゲエネフは——屢々本書中に見えるであらう如く——全く正當であつた。露西亞語の語彙の豊富な事は驚くばかりである。西歐の諸國語にあつては、多くの言葉は、或る一定の思想を表現するには一つしか當

らないのであるが、露西亞語にあつては、同じアイデアの種々の色合を描き出すに三つも四つもの同じ意味の言葉がある。殊に人間の感情の——優しさとか、愛とか、悲しみとか、歡びとかの——種々の色合や、それからまた同じ行爲のさまざまの度合などを寫すに豊富である。翻譯の場合に於ける露西亞語の靱やかさは、如何なる他の國語にも、吾々は同數の最も美しい、正確な、さうして眞に外國作家の詩的描出をなし得る言葉を見出し得ぬ程である。全然性格の異なる詩人、例へばハイネとベランジエ、ロングフェローとシラー、シエレーとゲーテ——また露西亞の翻譯家にとつて人氣のあるシエークスピーアに就ては言ふ迄もないが——なども、同様に巧みに露譯する事が出来る。ボルテールの諷刺、デツケンズの躍動せるユーモア、セルヴァンテスの氣持の良い滑稽なども、同じく容易に翻譯する事が出来る。其上に露西亞語は音樂的特質を持つてゐるので、詩を原詩と同じ韻律で翻譯するに適してゐる。ロングフェローの『ハイアウオーザ』（二種の翻譯があつて、いづれも立派なものである）、ハイネの氣まぐれな抒情詩、シラーの短詩、各國の調子のいゝ民謡、ベランジエの愉快な小唄など、原詩と全く同じリズムでもつて、露西亞語で讀む事が出来る。徹底的に曖昧な獨逸哲學の如きも、それら十八世紀の哲學者の書いたその儘のスタイルで露譯されてゐる。また最もよい英國作家の、短かい、コンクリートな、表現的な、簡潔な文章の如きも、露國の翻譯家に何等の困難をも感ぜしめないものである。

ツエツク語、ポオランド語、モラヴィア語、セルビア語、ブルガリア語、及び其他の幾つかの小國語と共に、露西亞語は大スラヴ語系に屬し、大スラヴ語はまたスカンデムナヴオ・サクソンや、羅匈系やそれからまたリツアニアや、ペルシヤンや、アルメニアンや、ジョージヤンなどと共に、大印度歐羅巴系、即ちアーリア系に屬してゐる。いつの日にか——早いことを望み、また早い程い——が——南スラヴ人の持つてゐる民謡や、數世紀の古さを持つてゐるツエツク、ポーランドなどの文學の寶玉が、西歐の讀者の前に展開せらるゝであらう。併し本書に於ては予は専ら東方の文學、即ち大スラヴの一枝たる露西亞文學に就てのみ述べ、しかも其中の南露西亞即ちウクライナの文學、及び白露西亞即ち西露西亞の民俗物語や歌謡等は省かうと思ふ。予は専ら大露西亞人の文學、即ち單に露西亞文學を取扱はうと思ふ。總てのスラヴ語のうちにて最も廣く話されてゐる言葉がある。それはプウシキンや、レエルモントフや、ツルゲエネフや、それからトルストイの言葉である。

すべての他の國語と同じく、露西亞語も多くの外國語を取入れた。スカンデイナヴィア語、トルコ語、蒙古語、それから後には希臘語や羅匈語をも取入れた。然し多くの外國語の同化や、ウラル・アルタイの根幹や、或はツラニアの根莖などが、時代の經過と共に露西亞國民に同化征服されたにもかゝらず其國語のみは驚くべき純粹を保つてゐた。紀元九世紀頃、モラヴィア人、または南スラヴ人の話してゐる

た言葉で翻譯された聖書が、今日もなほ残つてゐて、普通の露西亞人に理解出來ると云ふ事は、實に驚くべき事柄である。勿論文法上の形式や、文章の構成は現代と異つてゐる。併し其根本は、甚だ多くの言葉同様に、一千年も前に通用した言葉其まゝで残つてゐる。

既に其時代に於てさへ、南斯拉ヴ語は餘程完全のものとなつてゐたに相違ない。福音書中極めて小數の語のみは希臘語で譯されてゐるが——それは南斯拉ヴ人の知らない事物の名で、其他の抽象的な言葉や、または原書の詩的な比喻などは、翻譯者にとつて的確な表現を發見するに何等の困難も無かつたのである。其上彼れ等の用ひた言葉の或るものは非常に立派なもので、其美しさは今日もなほ失はれないのである。例へばゲーテの不朽の悲劇なる『ファウスト』の中で、積學ファウスト博士が、『始めに言葉ありき』と云ふ一文を描き出すに當つて、非常に困難を感じる事は誰でも知つて居る。近代獨逸語に於ける『言葉』と云ふ文字はファウスト博士にとつては、『言葉は神なり』と云ふ思想を表現するには餘りに淺いと思はれた。古い斯拉ヴ譯には『слово』と云ふ言葉がある。やはり『言葉』と云ふ意味を現はしてゐる。併しそれと同時に其言葉は近代露西亞語に於てさへ『das Wort』と云ふ言葉よりも遙に深い意味をもつてゐる。古代斯拉ヴ語の『slavo』と云ふ語は、また『Intellect』——獨逸語の『Vernunft』と云ふ意味をも含んでゐた。従つて聖書の文章の第二の意味と少しも矛盾する事なく、十分の深さを以て其思想を讀者に傳へ

た。

予は茲に露西亞語の構成の美しさに就て、一つのアイデアを披歴し得ると思ふ。しかもそれは十一世紀の頃北露西亞に於て話されたのであるが、其例はノヴゴロツドの僧正の説教中に保持されてゐる（一〇三五年）。その説教の短かい文章は、新に受洗した信者に諒解せしめんが爲に用ひられたもので、實際立派なものである。併し僧正の基督教義に對する概念は、全くビザンチン・ノスチツクの教理を缺き、現に多數の露西亞人間に理解された、または理解される基督教義の中では、最も風格の特殊なものである。

現時に於ては、露西亞語（大露西亞語）は全く方言から獨立した。殆ど一千五百万人に話される小露西亞語、即ちウクライナ語は、それ自身の文學——民俗物語とか又は近代文學など——を持つてゐるが、疑もなく分岐した言葉である。恰も諾威語及び丁抹語が瑞典語から岐れ、または葡萄牙語及びカタロニア語がカスチル語即ち西班牙語から岐たれたのと同様である。また西部露西亞の或る地方で話される白露西亞語は、方言と云ふよりも矢張り露西亞語から分岐した特徴を持つてゐる。大露西亞語、即ち普通に所謂露西亞語は、北部、中部、東部、及び南部露西亞の人民殆ど八千万と云ふ大多數に話され、また北コオカサス、西比利亞に於ても用ひられてゐる。其發音は廣い國土の場所を異にするに従つて多少の

差異がある。併しそれにもかゝらずプウシキンや、ゴオゴリや、ツルゲエネフや、トルストイ等が文學上に用ひた言葉は、すべてのそれ等夥しき人々に諒解されてゐる。露西亞の古典文學は田舎にまで數百萬部流布し、數年前プウシキンの作物の著作権が其最後に達した時（彼の死後五十年）の如きは、彼の全集は——其あるものは十卷より成つてゐるが——全部一圓五十錢と云ふ信じがたい程の安價で、十萬部も發賣販布せられた。それと共に彼の詩歌小説の分冊本は、數千の田舎廻りの行商人に依つて、一部二三錢で數百萬部賣り廣められてゐる。十二卷完成のゴオゴリや、ツルゲエネフやゴンチヤロオフなどの全集でさへ、一年の中に二十萬部も賣れた事がある。之れに依て見るも、同國民の智識的統一の優越なるは自ら明である。

初期の民俗文學、民俗物語——詩歌——古話

露西亞の初期民俗文學は、其一部分は今尙ほ人民の記憶にのみよつて保存されてゐるが、其量は驚くばかりに豊富で、しかも深甚の興味を有するものである。如何なる西歐諸國と雖も、露西亞に於けるが如く、傳説、物語、抒情的民謡——其或る物は非常に立派である——其他古代叙事詩等の豊富な國は無

い。勿論他の歐洲諸國と雖も、或る時は同じく豊富な民俗文學を持つてゐたに相違ないが、其大部分は科學的探求者が其價値を認むる前に、又はそれを蒐集せんとする前に亡びてしまつたのである。露西亞に於てはこの寶玉が、文明の及ばざる僻遠の地、殊にオネガ湖の周圍に於て保存せられてゐた。されば十八世紀及び十九世紀に於て、民俗學研究者等がそれを蒐集し初めた時には、彼等は北露西亞及び小露西等に於て、なほ老詩人等が原始的の絃樂器を奏しつゝ、頗る起源の古い歌を歌ひつゝ、田舎を遍歴するのを發見した。

其外種々の古い詩歌が、彼等田舎者に歌はれてゐる。年々の祭日——クリスマスとか、復活祭とか、土用祭とか——には、それぞれの歌があつて、併も邪宗崇拜時代から其諧調を保つてゐる。非常に複雑な儀式の伴ふ結婚式の時や、又は葬式の時などには、それぞれ百姓の女に依つて古い歌が歌はれる。勿論之等の歌と雖も、年と共に壞損して行つた。さうして其或る物は單に斷片として残るに過ぎなかつた。併し俚諺に所謂『歌の文句は一語も變へてはいけない』と云ふのを信じて、既に其文句の意味は大體失はれたにもかゝらず、各地の婦人達は相變らず古い歌を歌ひつゞけてゐる。

それからまた多くの物語がある。それらの多くはアリア族の各國に行はれてゐる物語と同じである。其或る種のもものはグリムのお伽噺の中で讀む事が出来る。併しまた其或るものは蒙古や土耳其から

來たものもあるし、同時に其の或るものは純然たる露西亞種の物もあるやうだ。それからまたカリキ (Kaliki) と稱する放浪の歌人に依て歌はれる非常に古い歌がある。之等の歌は全く東方から借りて來たもので、『アツシリア王アキム』とか、『美人ヘレン』とか、または『歴山大王』『ペルシヤのルステム』などの如き、露西亞よりも他國の英雄美人などを歌つたものである。之等東方の傳説や物語の露譯が、民俗學又は神話などの研究者に多大の興味を寄與するは言ふ迄もない事である。

最後にビリイニイ (Byliny) と稱する叙事詩があるが、之はアイスランドの古話 (Sagas) に通ずるものである。現時に於ても之等の叙事詩は北露西亞の田舎で、非常に起源の古い特殊の樂器を持つた詩人に依つて歌はれてゐる。之等の老詩人は樂器を奏でながら、一種の暗誦のやうな調子で其一二章を語り、それから次の章を靜かに吟誦するまでに、彼自身の調子を入れて其調諧をつゞけて行く。不幸にして之等の老詩人は、忽ち世の中から消えて了つたが、併し三十年ばかり前には、彼等の幾人かゞ聖彼得斯堡 (ペトロクラード) の北東オロオネツツ地方に生きてゐた。予も一度それを聞いた事があるが、それはヒルフェルデングが首都へ連れて來たもので、彼は其不思議なる歌を露國地理學協會に於て歌つた。幸にして之等の叙事詩は適當の時期に蒐集し初められたので——十八世紀中から——そして専門家に依つて熱心に繼續せられたので、露西亞は今や恐らくこの種の歌の最も豊富な蒐集を有し——始ど四百種——

それが爲にそれらの歌は忘却の海から救はれた。

露西亞の叙事詩の主人公は、多くは諸國遍歴の騎士であつて、その通俗的傳説は『キエフの王子』『日の神ウラヂミイル』など云ふ話に結び付いたのである。之等の騎士即ち『ムウロムのイリイア』『ドブリーニア・ニキイチツチ』『村人ニコラス』『牧師の子アレキセイ』などいふ豪傑は、露西亞を通じて代表的なものであつて、いづれも異常な怪力を與へられ、其土地を悩ますところの巨人の住む國を打ち従へ、または蒙古や土耳其などを打ち拂つたのである。それからまた彼等は遠い國へ行つて、首領ウラヂミイル王子の爲に、或はまた自分の爲に、花嫁を見付けやうとする。勿論其旅行中に、彼等はさまざまの冒険に出逢ふのであるが、其中でも不思議な魔術は主要なる役目を演ずるのである。之等古話の主人公は、皆それ／＼の個性を持つてゐる。例へば農夫の子イリイアは、金錢や富などには眼もくれないで、只管巨人や異人の國の掃蕩にのみ努める。村人ニコラスは土地耕作者を代表するところの力の擬人化されたものである。其重いプラオは何人もそれを大地から抜き出す事は出来ない。然るに彼はそれを片手で持ち上げて、その上に雲の上まで投げ上る。ドブリーニアは惡龍退治者の或る姿をあらはしたもので、聖ジョオジもそれに屬する一人である。サアドコは富める商人を擬人化したものである。またチュリイロは都雅な、美しい、上品な男で、あらゆる婦人が彼を見ると直ちに戀に陥るのである。

それと同時に之等豪傑の面々には、又疑もなく神話的特色がある。されば初期のビリイニイ研究等は、グリムの影響を受けて其仕事をしてゐたのであるが、之等の豪傑をスラヴの神話の斷片として説明せんとし、其中では自然の力が主人公として擬人化されたのであると説明せんと努力した。即ち彼等はイリアに雷神の風貌を見出した。悪龍退治のドブリーニアは受動的方面の太陽を代表したものと想像され——其能動的戰鬥力はイリアに與へられてゐると想像された。サドコは航海と海神の擬人化とせられ、その海神とはネプチューンであるとせられた。チユリイロは誘惑的要素の代表者と見られた。其他の物もまた同様である。かくの如きは少くも初期の研究者等に依つて古話に與へられた解釋であつた。

ヴェー・スタアソフは其著『露西亞のビリイニイの起源』(一八六八年)に於て、以上の如き議論を全然顛覆した。非常に豊富な議論を以つて、彼は之等の叙事詩はスラヴ神話の斷片ではなくて、東方の物語から借りて來た物であると云ふ事を證據立てた。それによればイリアは露西亞の周圍にあるイランの傳説のルステムである。ドブリーニアは印度の民俗物語のクリシュナで、サアドコはノルマンの物語のそれと同じく、東方の物語にある商人である。すべての露西亞の叙事詩の主人公は東方に起源を持つてゐると。また他の研究者等はスタアソフよりも更に研究の歩を進めてゐる。彼等は露西亞の叙事詩の主人公に、十四世紀または十五世紀に住んでゐた重要ならぬ人々を見(ムウロムのイリアは實際スカンデイナ

ヴァリアの記録には歴史上の人物として記されてゐる。それに東方の物語から借りて來た英雄の功業を結び付けたものであると見た。従つてビリイニイの主人公は、ウラヂミイルの時代には何事をもなし得ないのであつて、まして古代のスラヴ神話には少しの關係も無いのであると。

新らしい又は或る一地方の人々が新らしい國土に到着する時に、必ずそれに附隨してゆく所の神話の漸次の進化及び移動は、恐らく以上に述べた矛盾を説明する援けとなるであらう。即ち露西亞の叙事詩の主人公に、神話的の姿があると言ふ事は、それは確かであるとなし得るであらう。たゞ其神話たるやスラヴに屬してゐないで、全くアーリア系に屬するのである。而して之等自然力の神話的代表者から、人間的英雄が東方に於て次第に進化したのであつた。

後代に至つて、之等東方の傳説が露西亞に擴り始めた時に、其主人公等の功業が、當時露西亞の範圍内に於て行動した露西亞人に賦與されたのであつた。露西亞民俗物語はそれ等のものを同化した。さうしてそれは彼等の最も深い半神話的の姿と、其特性とを保ち得たと同時に、イランのルステムや、印度の惡龍征服者や、東方の商人や、其他のものに新らしい特色、即ち純粹の露西亞的特色を與へた。言はゞそれは其神秘的な材料がイラン人や印度人に擅有され、人間化されてゐた時に、それに着せて置いた着物を剥ぎ取つて、其神秘的材料に今度は露西亞の着物を着せたやうなものである——恰も歷山大王の

物語のやうに。予は曾て其話をトランスバイカルに於て聞いた事があるが、そこでは希臘の英雄はブリ
アートの特性を賦與されてゐた。而して其多くの功業はトランスバイカルの如き山上に於て行はれた事
になつてゐた。併しながら露西亞の民俗物語は、簡單にペルシヤ王子ルステムの着物を露西亞の農夫イリ
イアに變へはしない。露西亞の古話は、其スタイルに於ても其依つて立つ處の詩的形像に於ても、亦一
面其主人公の特質に於ても、新たに創造されたものである。其主人公は全く露西亞人である。例へば彼
等はスカンデイナヴィアのヒーローのやうに、決して血の復讐などを求めない。彼等の行動は、殊に『年長の
ヒーロー』の行動は、個人の目的の爲に指圖されるが如き事はなくて、露西亞人の一般生活の特色たる
社會精神に依つて染められてゐる。彼等はルステムがペルシヤ人であつたが如くに露西亞人である。之
等古話の書かれた時に就ては、一般に十世紀から十一二世紀であると信ぜられてゐる。併しそれが一定
した形となつたのは——即ち吾人に到達したやうな物となつたのは——十四世紀である。それ以後彼等
は僅の變化しか受けてゐない。

之等の古話に於て、露西亞は稀に見る詩美ある貴き國民的遺産を持つてゐる。英國に於てはそれがラ
ルストーンによつて十分に鑑賞され、又佛蘭西に於ては歴史家ラムボオによつて深くその價値を認められ
た。

『イゴオル侵入の歌』

露西亞は彼女のイリアツドを持たない。露西亞にはイリイアや、ドブリイニアや、サアドコや、チュ
リイロや、其他の英雄豪傑の功業を歌ひ、そしてホーマーの叙事詩又は芬蘭の『カレヴァーラ』のやう
な詩を作り出さうとする詩人が無かつた。この事は僅に一團の傳説によつて行はれた。『イゴオル侵入の
歌』(Slovoo Pokulie Igoreve)がそれである。

此詩は十二世紀の末、又は十三世紀の初めに書かれた。(十四世紀又は十五世紀の日附がある其全原稿
は、千八百十二年のモスコウの大火の際に焼失した。)それは疑もなく一人の著者に依つて書かれたもの
であつた。さうして其美しさと詩形とは『ニーベルンゲンの歌』、または、『ローランドの歌』に匹敵すべ
きものである。それは千百八十五年に起つた事實を歌つてゐる。キエフの王子イゴオルは勇士を引率し
て、ポオロフチへ侵入すべく出發する。ポオロフチは南東露西亞の大平原を占領し、絶へず露西亞の村
落へ侵入した。その大平原を進軍してゐる時、あらゆる種類の兇兆が現はれる——太陽が暗くなつて其
影を露西亞の勇士の上に投げたり、動物がいろなく警告をしたりなどした。併しイゴオルは奮然とし

て叫んだ。『わが同胞及び戦友よ、ポオロフチの捕虜とならんよりは寧ろ死を選べ！吾等をしてドンの水へ進軍せしめよ。吾等の槍をポオロフチに當つて折れしめよ。吾は吾が首を戦場に残すか、然らずんば吾が黄金の兜を以つてドン河の水を飲まんと欲す』かくして再び進軍が始まつた。遂にポオロフチに出合つてそこに大激戦が起つた。

戦争の描寫は、その中には各種の自然物も仲間に入つてゐるが——驚や、狼や、狐などが、露西亞軍の赤い楯の後から鳴いてゐる——驚嘆すべきものである。イゴオルの軍隊は破れた。『曉から黄昏に至る迄、黄昏から曉に至る迄、鐵箭飛び、劍戟は鐵甲の上に碎け、槍は遠き異郷の土——ポオロフチの國に於て折れた。』『馬蹄に踏まるゝ大地には白骨散亂し、やがては此の種よりして慘憺たる苦惱が露西亞の内地にも起るべく見へた。』

かくて初期の露西亞の詩中最も優秀なる一節になる。——即ちプチイヴルの町にて夫の歸りを待つイゴオルの妻ヤロスラアヴナの悲嘆となる。

『ヤロスラアヴナの聲は郭公のうち嘆くが如くに響く、太陽の昇ると共に。

『吾は郭公の如く河に沿うて飛び行かん。われはわが海狸の袖をカアヤラの水に濡し、それをもてわ

が背の君の痛手を——わが背の君の深き痛手を洗はんと欲す。

『ヤロスラアヴナはプチイヴルの城壁に倚つて嘆く。

『おゝ、風よ、恐ろしき風よ！ 何故に汝は、あゝ、しかく烈しく吹きしや？ 何故に汝の輕き羽根に乗せてカン（汗）の矢をわが夫の君の勇士等に運びしや？ 雲の上高く吹けばそれにて汝には足るではないか？ 何故に汝は吾が愛人を大野の草の上に吹き例せしか？

『ヤロスラアヴナはプチイヴルの城壁に倚つて嘆く。

『おゝ、光榮あるドニーペルよ、汝は岩山を貫いてポオロフチの國へ流れゆく。汝はスヴィーアトスラアヴのボートを、コビイアーク汗と戦はんが爲に運んで行つた。おゝ、わが夫の君を吾に運び返せ。さすれば吾はまた海に行く汝の潮にまかせて吾が涙を流さじ。

『ヤロスラアヴナはプチイヴルの城壁に倚つて嘆く。

『輝く太陽よ、いと輝く太陽よ！ 汝は總ての物に熱を與へ、汝は總てのものに向つて輝く。何故に汝は其燃ゆる光をわが夫の君の勇士に送りしや。何故に汝は水もなき大野にて、彼等の携ふる弓を照せしや？ 何故に汝は彼等をして渴せしめ、それが爲に其矢を負ふだに物憂からしめしや？』

この小断片は、『イゴオル侵入の歌』の一般的特色及び美に就ての或る觀念を與へる。

思ふにこの詩は、當時作られ又は歌はれたものゝ唯一のものではないに相違ない。緒言其ものに多くの詩人殊にバヤアンと云ふ詩人に就て語つてゐる。このバヤアンの暗誦及び歌は、樹の梢を吹く風に譬へられてゐる。かくの如き多くのバヤアンはイゴオル及び其勇士等の祭の間、右に述べたものと同じやうな歌を歌つたに相違ない。不幸にしてこの種の歌は右の一つしか吾等に達しなかつた。露西亞の教會殊に十五、十六、十七世紀に於ける教會は、人民の中に流布してゐる總ての叙事詩を歌ふ事を何の容赦もなく禁止した。さうしてそれを歌ふものを邪教徒となし、かゝる種類の詩人及び其仲間にて古い歌を歌ふものを嚴罰に處した。それが爲にこの種の古代民俗物語は極めて僅しか残らなかつた。

併も之等少數の過去の遺物さへ、露西亞文學の上に有力なる影響を及ぼし、それ以後純粹の宗教的のもの以外、他の題目を取扱ふの自由を得た。若し露西亞の作詩法が、綴音的なるに反して韻律的の形をとつたとすれば、それはこの形が民謡によつて露西亞の詩人の上に置かれたからであつた。其上全く最近に至る迄、これ等の民謡は、露西亞の田園生活に於て、等しく地主や百姓の家庭に於て、極めて重要な條項をなしてゐた。即ち露西亞の詩人等に深い感化を與へざるを得なかつた。最初の露西亞の大詩人プウシキンは、かゝる物語を詩に書き直す事に依て其文學的生活を初めた。併もその物語と云ふのは彼

が子供の頃、長い冬の夜などに年老ひた乳母から聞いたものである。それから千八百三十五年に既に一つのオペラ（フェルストオフスキイのアスコオルドの墓）が出来たが、これも露西亞に信ずべからざる程多くの音楽的な民謡があつたがためである。このオペラは一般に知られてゐる傳説を基礎としたものであるが、その純粹の露西亞的諧調は、極めて音楽的素養の少ない者の耳をも直ちに捕へ去るのである。而してこれがまたダルゴミイヂユスキイや其他の若い作者等のオペラが、現に地方に於て、成功を以て、農夫等の聴衆に、農夫等の唱歌隊によつて歌はるゝ所以である。

露西亞に於ては斯くの如く、民俗物語や民謡などが無限の役に立つてゐるのである。彼等は全露西亞の日用語の或る程度の統一を維持してゐる。恰も文學上の言葉と一般民衆の言葉との統一を維持してゐると同様に。またグリーンカや、チャイコオフスキイや、リイムスキイや、コオルサコフや、ボロヂインや其他の音楽者の音楽と、農夫唱歌隊の音楽との間に或る種の統一を維持してゐるやうに——詩人及び作曲家共に農夫に近づき易く仕事をしてゐるのである。

年代記

最後に、初期の露西亞文學を説くに當つては、少くとも、數語を年代期に就て費さねばならぬ。如何なる國ても、この種の蒐集をより豊富に持つてゐるところは無い。十、十一、十二世紀の頃、露西亞に於ては發展の中心地が數ヶ所あつた。キエフ、ノヴゴロツド、プスコフ、ウオリイニアの地、スウツダルの地（ウラヂミール、モスクワ）リアザン等之等の諸都市は其當時それ〴〵獨立した共和國を形成してゐた。たゞ其共通せる點は單に言語及び宗教を一つにするだけであつた。さういふわけであるから、彼等の總てはそれ〴〵其君主を——軍隊の主腦及び司法官として——リウリツク家から擁立した。之等の各中心地は、それ〴〵其地方の生活や特色を記録したところの年代記を持つてゐる。南露西亞及びウオリイニアの年代記は——所謂『ネストルの年代記』と呼ばれて一般によく知られてゐるが、單に事實を記録したのみの乾燥無味の年代記ではなくて、各所に非常に空想的な詩的な處がある。ノヴゴロツドの年代記は富める商人の町であるといふ烙印を帯びてゐる。それは非常に事實に拘泥したもので、スウツダルに對するノヴゴロツド共和國の勝利を記する時だけ、記録者は其題材に熱心であつた。その反對に其姉妹共和國たるプスコフの記録は、頗るデモクラチツクな精神を以て満たされてゐる。即ち其記録は民主的の同感と、非常に繪畫的の姿態とを以て、プスコフの貧民と富者——『黒い人』と『白い人』と——の争鬭を記してゐる。而して之等の年代記は、確かに初めに想像されたやうに僧侶の手になつた物ではなくて、政

界に身を處した人が、自然に他邦との協商とか、又は自國の内憂外患とか、ら十分に事實を知つて、そして各市の記録を作つたものでなければならぬ。

其上多くの年代記は、殊にキエフ又は『ネストルの年代記』に於てさうであるが、單なる事件の記録以上に何物かを含んでゐる。後者のネストルと云ふ名を見れば分るやうに（何時から如何にして露領になつたか分らぬが）彼等は希臘のモデルの刺戟のもとに、その國の歴史を書かうと企てたのである。之等吾人の手に達した手記は——殊にキエフの年代記の場合に於てさうであるが——非常に複雑な構造を有し、歴史家等は、種々の異なる時代からその上へくくと加へられた材料の諸層を識別する。古い傳説や恐らくビザンチンの歴史家から借りたものであらう、古い歴史的智識の斷片や、古い政治的協商や、イゴールの侵入のやうな或る挿話に關した完全なる詩や、または種々の時代の地方の記録などが、彼等の記述の中に這入つてゐる。其結果非常に古い時代に關したものや、またはコンスタンチノブルの年代記編者又は歴史家によつて十分に確定された歴史上の事實などが、純粹の神話的傳説と混合した。併しこの事實は確に露西亞の年代記に文學的に高い價值を與へた。殊に南方及び南西露西亞の年代記は、古代文學の最も貴むべき斷片を含んでゐる。

かくの如きは、十三世紀の初めに於て露西亞の持つてゐた文學の寶庫であつた。

中世紀の文學

紀元一千二百二十三年に於ける蒙古人の入寇は、總ての之等若き文明を破壊し、露西亞を全く新しい河床へ投げ入れた。南部及び中部露西亞の主要なる都市は全く荒廢に歸せしめられた。當時最も人口多く且つ智識の中心であつたキエフの町はさんぐくに破壊せられて、爾後二世紀の間は歴史の表面から消えてしまつた。大都市の住民は大いに抵抗を試みたにもかゝはらず、悉く蒙古人の爲に捕虜となるか、又は殺戮されてしまつた。殊に露西亞にとつて不幸なるは、蒙古人につゞいて、土耳其人がバルカン半島に侵入して來た事である。十五世紀の終に於ては、露西亞がそれにより又はそれを通して智識を受けとるを常とした二つの國、即ちセルビアとブルガリアが土耳其人の支配下に落ちた。露西亞の總ての生活は根柢より變形せざるを得なくなつた。

この入寇のある前には、西歐諸國に於ける中世の共和市と同じく、露西亞には獨立した多くの共和國があつた。ところが今度は一つの陸軍國が、教會の有力なる支持により、モスコウに於て漸次興起して來た。そして蒙古の汗の助力により、周圍の小獨立國を征服した。かくして政治家及び教會の最も活

動家の主なる努力は、今や蒙古人の羈絆を脱却するに足る勢力ある國家の建設に向つて進んだ。國家の理想とする處は、地方の自治と同盟といふ事に變つた。基督教的國家を建設せんが爲には、總ての智識及び道德が厭ふべき邪教徒の蒙古人と何等接觸する必要な教會は、過去に於て迫害暴戾を極めし蒙古人に變つて中心力となつた。そして希臘正教の理想のもとに、モスコウ王の限りなき權力を建設せんとして大いに努力した。軍隊の力を増さんが爲に農奴制が採用された。總ての獨立した地方生活は破壊された。モスコウの理想は教會及び國家の中心といふ事になり、教會の力に依て保持されるやうになつた。そしてモスコウはコンスタンチノープルの後繼者——即ち『第三羅馬帝國』で、眞の基督教は茲に發展しつゝありと宣言された。後年蒙古の羈絆から脱却した時に、モスコウ王國統一の仕事はツァールと教會とに依て繼續された。併しラチン教會が其權威を露西亞に伸ばさんとするを防がんが爲には、西歐勢力の侵入に對して随分激しい争鬭を行つた。

かゝる新らしき状態は、其必要の結果として文學の發達上に深い影響を及ぼした。初期の叙事詩の新味に富み且つ生氣ある若々しさは永久に無くなつて了つた。悲哀、憂鬱、忍従などいふ事が通俗物語の主なる姿となつた。絶えず韃靼人が侵入して、全村民を捕虜とし、南東の荒野に於ける彼等の陣營に奪ひ去つた事や、奴隸として使はるゝ囚人の苦痛や、征服地に勝利者として來り、高き貢を徵集せんとし

て來るバスカアク人の訪問や、または發展しつゝある軍國によつて人民の上に科せらるゝ困難や——總て之等のものは、爾後永久に失はれざる深き悲哀の調子を民謡などに與へた。それと同時に放浪詩人に依て歌はれた叙事詩や、古い愉快なお祭歌などは嚴禁されて、若しそれを強て歌ふ者は、教會の爲に殘酷な刑罰に處せられた。何となれば、教會は之等の歌を過去邪教時代の遺物であるばかりではなく、また韃靼人と結合し得る鎖と見たからである。

學問は次第に寺院に集中せられ、その一つ一つはまた侵入者に對する堡壘となつた。従つて其文學は基督教文學に制限せられた。そして全く學問的のものとなつた。自然に關する智識は『不神聖』で、一種の妖術であるとせられた。禁慾主義は最上の美德なりと説かれ、文學も亦それが主なる姿となつた。聖徒に關する傳説は廣く一般に讀まれ、且つ語られるやうになつた。而してこの種の學問としては、西歐にて發展せる中世紀の大學に於ても比較し得るものなしとせられた。自然に關する智識の欲求は、自惚のしるしであるとして、教會より激しく罰せられた。總ての詩歌は罪惡であつた。年代記は生氣ある特色を失つて、新興國の功業、または單に地方僧侶や寺院の長老に關する不必要的些事などばかり記した極めて乾燥無味なる細説となつた。

十二世紀中、ノヴゴロツドやプスコフなどの北部共和國に於ては、一部に新教合理論が大いに唱へら

れ、他方に初期基督教同胞主義に關する教義が盛に傳へられた。背理の福音書、即ち舊約聖書や、眞のクリスチヤニチーを論じた種々の書籍などが、熱心に寫され、そして廣く汎布された。そこで中央露西亞の教會長は、かゝる教義改造に對する總ての傾向に烈しく反對した。そして無理にも希臘正教會の教義に固着した。種々の福音書の解釋は邪教とせられた。宗教界の智識的生活は、モスコウ教會の高僧に對する批評と同じく、危険なものとして取扱はれた。而してそれを敢てした者はモスコウから遁れて、遠く北國の僧院に隠れ家を求めた。露西亞には到達しなかつたが、西歐諸國に新生命を與へた文藝復興の大運動に就ては、教會はそれを邪教崇拜に歸るものであると考へた。そして其範圍内へ來た之等の先驅者を、火刑臺上にて火刑に處したり、拷問臺上で責め殺したり、種々な殘酷の方法で殲滅した。

予はこの邊四五世紀の文學に就て細叙する事をやめよう。何となれば、この期間は露西亞文學研究者にとつて興味のある問題が少しも無いからである。たゞ等閑に附し去るべからざる二三の著述に就て述べて置かう。

其一つは恐怖皇帝ジョン四世と、モスコウを逃れてリツアニアに行つた帝の老臣のクウルビスキイ公との間に交換された手紙である。遠きリツアニアの領域から、彼は殘忍にして半狂的の前主君に、長い叱責の手翰を送つた。それに對して帝は、ツアールの權威の神聖犯すべからざるものであるといふ事を

書いて答へた。この應答は、實にその時代の政治思想及び學問發展の最も特色あるものである。

ジョン四世の死後（ジョンは露西亞史上佛蘭西のルイ十一世と同位置を占める人で、後に封建諸侯の力によつて——實は殘酷なる韃靼人の爲に——火と劍とで殺された）露西亞は既に知らるゝやうに、大騷亂の時代に入つた。篡奪者デミトリウスは波蘭から來て、自らジョンの子であると稱し、莫斯科の王位に上つた。従つてポーランド人が露西亞に侵入し、モスコウ、スモレエンスク、其他の西部諸都市の主人公となつた。デミトリウスが戴冠後數月ならずして顛覆するや、一般農夫の叛亂が勃發し、同時に中央露西亞はコサツクの軍隊に侵入せられ、また五六の新篡奪者が現はれた。かゝる『騷擾時代』の事は何か民謡のやうなものに其痕跡が残る筈であるが、しかも續いて來たる農奴制の暗黒時代のために全く影を没して了つた。たゞ吾人は、一千六百十九年頃露國に居て、其時代に關した幾らかの歌を書きとめて置いた英國人リチャード・ジェームスに依て、僅かに其一端を知るのみである。それと同じ事を民俗文學に就ても言ふ事が出来る。何となれば暗黒時代以後、民俗文學は漸く十七世紀の後期に至つて現はれたに過ぎないから。ロマノフ一世（ミハイル、一六一二年——一六四〇年）の下に農奴制の確立された事と、ついで起つた農夫の廣い叛亂とは、壓迫せられたる農夫等の寵兒となつたステパン・ラジインの恐るべき暴動に於て頂點に達した。最後に不遵奉者に對する烈しい且つ殘酷な迫害は、彼等を東方ウラルの奥

へ移動せしめたが——總ての之等の事件は、彼等の民謡の中に表白されてゐなければならぬ筈である。併し國家と教會とは、之等謀反の精神を帶ぶる處の總ての物を残酷に驅逐したので、當時の民衆的作物は何一つ吾等に到達しなかつた。たゞ論戰的の數種の書物と、流竄せられた一僧侶の注意すべき自叙傳とが、僅かに國教不遵奉者に依て保存せられたに過ぎなかつた。

教會の分裂——アヴァクウムの記録

最初の露西亞語のバイブルは、一千五百八十年波蘭に於て印刷せられた。それより數年の後、モスコウに一印刷局が建てられた。そこで教會の當事者等は、手記によつて流布してゐた聖書を印刷する事に決心した。其當時用ひられた手記の物は誤謬に満ちてゐるから、先づ印刷を初める前に、それを希臘の本文と比較して訂正する必要があつた。で、之が訂正は、希臘から來た學者と、キエフの希臘羅甸大學から來た學者とが參與して、モスコウに於て企てられた。併し種々の理由からして、この事業は多方面の不平の原因となり、十七世紀の中葉に於て、驚くべき教會の分裂(Раскол)となつた。この分裂は單に神學の解釋の相異とか、または希臘語の讀方とかゝら起つた事件と云ふ事は出來ぬ。十七世紀はモスコ

ウ教會が、國家に於て驚くべき勢力を得た世紀である。大なる野心家なる總主教ニコンは、西に於いて法王の振舞ふが如く、東に於ける法王たらんと欲した。其ためには自己の壯大と豪華とを人民に印象せしめんとした——その結果は管下の農夫と、低級の僧侶とに重税を賦課する事となつた。彼は兩者に嫌惡され、『羅甸風』に流るゝものであると言つて人民に攻撃された。それ故人民と僧侶——殊に高級僧侶——との間の分裂は、人民が遠く希臘正教會から分離するといふ性質のものとなつた。

其當時の多くの國教不遵奉者（ニコノフオミスト）の記録は、純粹の學問的のものであつて、従つて文學的趣味には乏しい。併しノンコンフオミストの一僧侶アヴァクウム（一六八一年死）の記録は、こゝに説くべき價值がある。彼は西比利亞に流され、コサツクの團體と共に、徒歩で黑龍江の岸まで行つた。其素朴にして摯實な、而して全然センセーションヨナリズムを缺いてゐる點は、今日まで露西亞の記録の模範として残つてゐる。次に其珍らしい著作の一例を引く。

『予がエニセイスクへ行つた時に』とアヴァクウムは書いた。『莫斯科から他の命令が來て、予をモスコウより二千哩の彼方ダウリアへ送り、パアシユコフの配下に置かん事を命じた。彼は六十人の從卒を従へてゐた。そして予の罪を罰する點に於て恐るべき人間である事を證據だてた。彼は常に其

部下を火刑に處し、苛責し、鞭撻した。予は屢々彼に語つて、彼の行爲の不正なる事を説いた。而して今や予自身彼の手中に落ちた。予等がアンガラ河を航行してゐる時に、彼は予に命じた。『舟から出ろ、貴様は異教徒だから舟なぞに乗るのは贅澤だ。山を越えて歩いて行け。』それは非常に困難であつた。山は高く、森は深く、石の斷崖は壁のやうに屹立してゐた——我々はそれを越へ、野獸や猛鳥などゝ共に歩いて行つた。予は彼に次の様な文句で初まつた小文を送つた。『人間は神を恐るべきものなり。よし天來の力なりと雖も、また總ての動物或は人間と雖も、皆主を恐れつゝあり。汝のみ一人神を蔑にす。』なほいろ／＼の事をこの手紙に書いて、予はそれを彼に送つた。忽ち五十人ばかりの者が來て、予を彼の前に捕へて行つた。彼は其手に劍を持ち、激怒の爲に震へながら、予に問ふた。『貴様は牧師だと思つてゐるのか、それとも貶黜された牧師だと思つてゐるのか。』と。予は答へた。『私は牧師のアヴァクウムですが、何か私に御用があるのですか。』彼は予の頭を打ち初めたそれから予を地上に投げ倒し、予が倒れてゐる間は打ちつゞけた。そして部下に七十二答の刑罰を命じた。予は『神の子イエス・クリスト助け給へ！』といふ言葉を以てそれに答へた。彼は予が慈悲を乞はないので一層怒つた。そして予を小さな堡砦に連れて行き、土牢の中に投じ、僅かな藁を與へたのみで、其冬は少しの火もない塔の中に過ごさせられた。その冬は寒さが酷しかつた。併し

予は少しの毛皮をも持たざるにかゝはらず、神は予を援けた。予は藁の上の犬のやうにそこに横はつた。ある日は予に食物を與へ、ある日は與へなかつた。あたりには鼠が群がつて來た。予は帽子で鼠を殺すのを常とした——憐れな馬鹿者共は予に一條のステツキすらも與へなかつた。

後年アヴァクウムは黒龍江の方へ移された。そして妻と共に寒い冬の日はこの大河の氷上を渡つて進む時、妻は烈しい疲勞から屢々氷上に倒れた。『其時予は彼女を授け起した。』とアヴァクウムは書いた。すると妻は絶望して叫んだ。『いつまで、ねえ貴郎、いつまでこの苦しみはつづくのでせう？』予は答へた。『死ぬまでさ』すると妻は起き上つて云つた。『さう、ぢやアまた出かけませうよ。』如何なる困難もこの偉人を征服する事は出来なかつた。彼は再び黒龍江からモスコウに呼び返された。そこで今一度其全旅程を徒歩で歸つた。モスコウに於て彼は教會と國家とに反抗した事を責められ、千六百八十一年遂に火刑に處せられた。

十八世紀

ペートル一世の烈しい改革は、從來踏み來つた半希臘式、半韃靼式の國を、軍國的歐羅巴式の國に變更したが、それはまた文學にも新らしき變化を與へた。ペートル一世の改革に就て、茲に其歴史的意義を説くは稍々其ところを得てゐないが、露西亞文學史上ペートルの事業に對して少くも二人の先驅者ある事を説く必要がある。

其一人は歴史家コトシイキン（一六三〇年—一六六七年）である。彼は莫斯科から瑞典に遁れ、そこでペートルの王位につく五十年前に露西亞歴史を書いた。其中で彼は熱心に莫斯科に於ける一般の無智の狀態を批判し、廣き改革の必要を説いた。その原稿は十九世紀にウプサラに於て發見せられる迄は知れなかつた。それと同じ思想を有する他の一人は、南スラヴ人クリイザアニツチである。彼は聖書校訂のために千六百五十九年莫斯科に呼ばれたが、そこで最も有名なる一冊の書物を書いた。その書の中で彼は同じく全體の改革の必要を述べた。二年の後に彼は西比利亞に流されて其處で死んだ。

ペートル一世は文學の重要なる事を十分に理解し、歐洲の智識學問を自國民の間に注入すべく努力したと同時に、當時露西亞の作家等に用ひられてゐた古いスラヴ語をも諒解したが、併しそれは最早國民の間に通用する現代語ではなくて、單に文學または一般學術發展の妨げとなるに過ぎぬといふ事を知つてゐた。其形も、其發想法も、其文法も、既に全く一般露西亞人には關係の無いものとなつてゐた。た

ゞ僅に宗教書類には用ふる事が出来たが、幾何や、代數や、兵書などを、聖書的の古代スラヴ語で書いたとすれば、それは單に謎に過ぎなかつた。そこでペートルは持ち前の鋭利な方法にて此困難を取り除いた。彼はそれ迄話されてはゐたが未だ書くには用ひられなかつた言葉を文學の中へ注入せんがために、新らしいアルファベットを創設した。このアルファベットは、其一部を古いスラヴ語から借りたものであるが、非常に單純化されたもので、今日用ひられてゐるものである。

文學其物はペートル一世には餘り興味のあるものでは無かつた。彼は印刷物に對して全く功利主義の見地から望み、彼の主なる目的は露西亞國民をして正確な科學の第一要素に親灸せしめんとするにあつた。即ち航海術や、交戰術や、築城術等を同様に會得せしめんとするにあつた。従つて此時代の作者には文學上の見地より見て興味ある者は少ない。茲には僅に其二三を述べて置かう。

ペートル一世時代の最も興味ある作家にして、また其直接の繼承者は、恐らくブロコポオウイツチであらう。彼は僧侶であるが、宗教的信仰には少しも染らず、西歐の學問智識の大なる崇拜者で、希臘スラヴ大學を創立した。叙述の序にカンテマイル(一七〇九年—一七四四年)の事をも述べて置かう。彼は其臣下と共に露西亞に移住したモルダヴィア公の子であつた。彼は諷刺物を書いたが、其中で彼は其時代の顯著な特徴である思想の自由といふ事を發表した。(一七三〇年—一七三八年まで彼は倫敦に於ける

大使であつた。ツクレチアオトフスキイ（一七〇三年—一七六九年）は幾分憂鬱な興味を持つてゐた。彼は或る牧師の子であるが、若い時に莫斯科で勉強せんが爲に父の許から逃げ出した。それから彼はアムステルダムへ、更にまた巴里へ、多くは徒歩で旅行した。巴里大學で勉學してから、彼は進歩せる思想の崇拜者となり、それを武骨なる詩に書いた。聖彼得堡に歸つてから、彼は其晩年を貧困の中に送り、露西亞の詩作を改革せんと努力して、總ての方面から嘲笑と等閑視との中に過ごした。彼は全く詩人的天分を缺いてゐたが、併し露西亞の詩界には非常に貢獻する處が多かつた。其時代までは、露西亞の詩は綴音的シラビツクであつた。併し彼は綴音的シラビツクの詩が露西亞語の精神に調和しないと云ふ事を諒解し、畢世の力を盡して詩を韻律的リズムカルの法則に従つて書くやうに改正すべく努力した。若しも彼が詩人的天分の閃きでも持つてゐたならば、その眼目とせる點を實現するに左程困難を感じなかつたであらう。不幸にして彼は全然それを持つてゐなかつた。従つて其詩は最も不可思議な技巧的のものとなつてしまつた。彼の詩の或る物は、甚しく調和しない言葉の羅列に過ぎなくて、韻律や押韻は如何にして得べきかといふ單なる目的を達するにさへ混雜を來してゐる。若しも韻をふむに他の方法が無い時には、彼は其行の終で一語を裂き、次の行を其語で初める事すら敢て意としなかつた。かゝる不合理を敢てしたにもかゝはらず、彼は露西亞の詩人に韻律的詩作法を採用せしめた點に於て成功した。而してそれ以後其規則が今日まで傳

はつてゐる。實際斯くして露西亞の通俗歌は自然の發展を遂げたのである。

それから又タチイスチエフ（一六八八年—一七五〇年）といふ歴史家があつた。彼は一冊の露西亞史を書いたが、別に帝國の地理に關する大作を初めた——非常な精力家で、宗教的の學問と共に、種々の科學をも大いに研究し、ウラル地方の鑛山の監督でもあつた。歴史の外に多くの政治的の著述をもした。彼は年代記の價値を認めた最初の人で、それを蒐集し、組織立て、將來の歴史家に研究の材料を供給した。併し彼は文學上には何等の痕跡をも残さなかつた。此時代には、以上述べ來つた人々よりも更に一步を進めて説くに價する一人の人があつた。それはロモノオソフ（一七二二年—一七六五年）である。彼はアンハンゲルに近き白海の一漁村の或る漁夫の家に生れた。彼も亦兩親の許から遁れて、徒歩でモスコウに行き、そこの僧侶の學校に入つて、述べ盡し難い程の貧困の中に生活した。後に彼は又徒歩でキエフに行き、そこで殆ど牧師に近い役目まで進んだ。其時ペテルブルグの科學院とモスコウの神學會とが一致して、十二人の良學生を外國へ留學させるといふ議が起つた。ロモノオソフも其一人に選ばれた。彼は獨逸に行き、當時の最も優れた自然科学者、殊にクリスチャン・ウオルフの許で自然科学を學んだ——いつも非常な貧困の中で、殆ど饑餓の淵に望みつゝ勉強した。一七四一年彼は露西亞に歸つて、聖彼得斯堡の科學院の一會員に任命された。

當時の科學院は數人の獨逸人の手中にあつて、併も彼等は露西亞の學者を嫌惡輕侮してゐたから、従つてロモノオソフも彼等から最も不親切な待遇を受けた。それが爲に大數學者オイラアをして、自然科學及化學上のロモノオソフの著述は彼の天才たる事を立證し、如何なる科學院も彼の如き人を有するは幸福であるといふ論文を書かざるを得ざらしむるに至つた。やがて獨逸人及び露西亞人の科學院會員間に厭ふべき争鬭が起り、殊に彼が酒を飲んで居つた時はそれが非常に烈しくならざるを得なかつた。彼の俸給は其刑罰として沒收されたので、彼は非常な貧困に陥り、警察へは拘留される、科學院の元老會議からは排斥される、殊に最も悪い事は政治的の迫害であつた。——斯の如きがロモノオソフの運命であつた。彼はエリザベス黨に加はつてゐたので、従つてカザリン二世が王位に就くや朝敵として取扱はれた。そして十九世紀に至るまで彼は正しく評價せらるゝに至らなかつた。

『ロモノオソフは彼自身一つの大學であつた。』とはプウシキンの説く處であるが、この斷定は確かに正しい斷定であつた。彼の著作はそれ程多方面であつた。彼は單に優れたる物理學者、化學者、地文學者、礦物學者たるばかりでなく、また露西亞文法の基礎をも置いた。勿論彼はそれを自然に進化するものとして考へ、あらゆる國語の一般的文法の一つとして考へたのであつた。彼は又いろいろな形式の詩を作り出し、また全然新らしい文學上の言葉をも作つた。それに就て、彼は『シセロの力ある雄辯や、ヴァーヂル

の光輝ある熱心や、オヴイツドの愉快なる談話や、それから哲學上の最も巧緻なる想像的概念や、或は物質のさまざまの性質に關する議論や、常に宇宙の構造や人事の上に行はれてゐる變化や』それらのものを描寫譯出するに全く適應する文學を創造したと云ふ事が出来る。これ等の事實を彼は其詩及び其科學的著作、『論說』等に於て證明してゐる。その『論說』に於て、彼はフンボルトの自然に關する詩的觀念を以てせる盲目的信仰に對し、科學を擁護すべくハツクスレーの用意を以て論述した。

彼の短詩は實際華やかなスタイルで書かれたもので、其時代に勢力のあつた偽古典主義に愛好されたものであつた。而して彼は『其昂上せる主題を取扱ふには』古いスラヴ的表現を用ひたが、併し科學其他の著作には普通の口語を用ひて大なる効果と力を得た。彼が露西亞化した種々の科學に就ては、彼は其根元を考究するに多くの時を費さなかつたが、併しコペルニカスや、ニウトンや、ハイゼンスなどのやうな理論的見地から多くの反對者に出あつた思想を辯護する場合には、彼は近代的の意味に於て眞の自然科學者たる實を示した。彼は少年時代に父——北方の強健なる漁夫——に従つて漁獵に行くのを常としたので、そこで自然を愛し自然現象をよく理解する素地を作つた。今日なほ其價值を失はないところの『北極探檢記』は其結果として出来たものである。此最後の著作に於て彼は熱の機械的理論に就て極めて斷定的表現法にて述べてゐるが、それは疑もなく現代の大發見に優に一世紀の先驅をなしてゐて

頗る注目すべき價值のあるものである——而してこの事實は露西亞に於てさへ全然見逃されてゐたのである。

ロモノオソフと同時代の人にスマロオコフ（一七一七年—一七七七年）がある。其當時『露西亞のラシ—ヌ』と云はれた人であるが、茲に少しく述べて置く必要がある。彼は高い貴族に屬し、全然佛蘭西の教育を受けた人である。その多くの戯曲は全く佛蘭西の偽古典派の模倣に過ぎないが、後章にも見えるが如く、露西亞の劇の發展には貢獻する處が多かつた。スマロオコフはまた抒情詩や、挽歌や、諷刺詩などを書いた——併し總て餘り重要な物ではない。併し彼の文章のスタイルの非常に立派であることや、其時代の流行たるスラヴ的古語に自由である事などは、茲に述べて置く價值がある。

カザリン二世の時代

一千七百五十二年から一千七百九十六年まで君臨したカザリン二世と共に、露西亞文學は新時代に入つた。彼等は先づ前時代の倦怠を振り落し、譬ひ多くの作家は未だ佛蘭西のモデル——主として偽古典派——の模倣をつゞけてゐるとは云へ、彼等はまた自國生活の直接の觀察から、種々の材料をとらへ來

つてそれを其作品の中に注入し初めた。勿論カザリンの治世の初期には、未だ其文學には極めて馬鹿々々しい若々しさがあつた。その頃女皇は佛蘭西の哲學者等と交際して、非常に進歩した思想を持つてゐたので、自ら召集した代議士等に與へんが爲に、有名なる教書(Natkrægt)——モンテスキューに基礎を置いたもの——を書いた。それからまた五六の喜劇を書き、其中で露西亞貴族の舊派の代表的人物等を嘲笑した。また月刊雑誌を發行して、其中で過激な保守論者及び進歩せる青年改革者等と論争した。文學大學が創設された。ヴオロントソオヴァ・ダアシユコオヴァ内親王は(一七四二年——一八一九年)——皇婿ペートル三世に反して果斷政策をとり、カザリン二世を援けて王政を執りし人——科學大學の總裁に任命された。女皇は熱心に露語辭典の編纂に就て大學を補助し、また露西亞文學に著しい印を残したところの雑誌を發行した。彼女が佛蘭西語で書いた記録(Mon Histoire)は、常に必ずしも公平であるわけではないが、歴史的な文章として價值のあるものである。それと同時に全く新しい文學運動が起つた。其結果として有名なる詩人のデルジャアヴィンヤ(一七四二年——一八一六年)喜劇作家のフォン・ウイージンヤ(一七四五年——一七九二年)最初の哲學者のノオヴィコフヤ(一七四二年——一八一八年)政治的評論家のラヂイシエフ(一七四九年——一八〇二年)等が輩出した。

デルジャアヴィンの詩は、吾々の今日要求するところには適合しない。彼はカザリンの桂冠詩人で、

女皇の美德やまたは其臣下の將軍や愛臣等の勝利などを、華やかな短詩に歌つた。其當時露西亞は黑海岸に確實な地歩を占め、歐洲諸國の問題に重要なる關係を持ち始めた時であつたから、デルジャアヴィンの愛國的感情を勃發せしむる機會に乏しくなかつた。併し彼にも多少眞の詩人のしるしがあつた。彼は自然の詩にはその感情を開き、それを歌つたものには立派なものがあつた。(頌歌、瀧の歌等)。加之之等の眞の詩は不自然な陳腐浮華な言葉にて充たされてゐる惡詩と相並んで見出されるが、明かに後者よりは優れてゐて、爾後の露西亞の詩人にとつて尊敬すべき實物教訓となつた。彼等は吾が國の詩人にマブネリズムを放棄せしむるために貢獻しなければならぬ。少年時代にデルジャアヴィンを崇拜したプウシキンは、其先行者によつて示された浮華なスタイルから直ちに不利益を感じなければならなかつた。而して其母國語を驅使する驚くべき手腕は、必然の結果として、以前に『詩的』であると考えられた技巧的な言葉を放擲しなければならなくなつた——彼は吾々の話す言葉で書き初めた。

フォン・ウイージン(或はフォンヴィデン)の喜劇は、全く彼の同時代への默示であつた。彼が二十二歳の時に書いた最初の喜劇『旅團長』は大なるセンセーションを惹き起した。而して今日も尙ほ其興味は失はれないのである。第二作『ネエドロオスル』(一七八二年)は露西亞文學上の一事件と目せられ、今日に於ても折々興行される事がある。一二つとも日常生活から取つた純粹の露西亞的材料を取扱つたものであ

る。尤もフォン・ウイージンはまた自由に外國作家から材料を借りて來たが、(旅團長の材料は丁抹の喜劇ホールベルクの『ジャン・ド・フランス』から借りたものである)併し彼は巧みに其主要人物を眞の露西亞人にした。此意味に於て彼は確かに露西亞の國民劇の創始者で、またプウシキン、ゴオゴリ、及び其後繼者等によつて大勢力となつた寫實的傾向を初めて文壇に注入した者であつた。彼の政見はカザリン二世が即位當時に獎勵した進歩的政見に屬し、パアニン伯の秘書官といふ有力の位置にあつたが爲に、大膽に、農奴制や、情實主義や、露國に於ける一般教育の缺乏等を非難した。

予は此時代の二三の他の作家を默過する。即ち美しくしくて軽い詩ヂュシエンカの作者ボグダノオヴィツチ(一七四三年—一八〇三年)クリロオフの先行者にして天分あるお伽噺の作家ヘムニツツエル(一七四五年—一七八四年)淺薄な諷刺詩を書いたカプニイスト(一七五七年—一八二九年)二三の人々と共に科學的に年代記や民俗物語などを蒐集したシエルバアトフ公(一七三三年—一七九〇年)、公は露西亞歴史の著作を企てたが、吾々は其中で年代記や其他の智識の起源に對する科學的批評など見る事が出来る。それから他の二三の作家など。併し予は十九世紀の劈頭に起つた共濟組合の運動に就て數言を費さねばならぬ。

共濟組合員、最初の政治思想の表明

十八世紀中に露國上流社會の特色となつた放埒の習慣、理想の缺乏、貴族の卑屈、農奴制の恐怖等は、其必然の結果として、識者の中に反動を生じた。この反動は一部は廣い範圍に亙つた共濟組合運動の、一部は當時廣く獨逸に擴がつてゐた神秘的教義に起源を有する基督教的神秘主義の形をとつた。共濟組合員及び彼等の友愛協會は、多數の人に道德教育を授けんとして、非常に眞面目な努力をなした。而して彼等はノオヴィコフ（一七四〇年—一八一八年）にこの革新の眞の使徒を發見した。彼は其文學的生活を非常に早く始めて、先づカザリン二世が即位の始めに創始した諷刺的の評論雜誌に筆を執つた。併し彼は『お祖母さん』（カザリンの事）との可憐な論争に於て、最早單に女皇を喜ばすに過ぎぬ淺薄な諷刺には満足しないといふ事實を示した。そして女皇の希望とは反對に、時代の惡弊の根本、即ち農奴制及び其社會上に被らす大害惡を剔抉した。ノオヴィコフは單に立派な教育があるばかりではなく、理想家としての深い道德的確信と、組織家及び事務家の才能とを持つてゐた。彼の評論は（それから得た純收入は悉く慈善事業及び教育事業に費されたが）直ちに『お祖母さん』から禁止されたので、彼はモスコウ

に於て最も成功せる印刷業及び出版業を始め、倫理的書籍の出版販賣を企てた。彼の大印刷所は、労働者のための病院及び一藥種店と結合してゐるが、その藥種店ではモスコウの多くの貧民に無料で施薬をしてゐた。さういふわけであるから、其印刷所は忽ち全露の書籍商等と事務的關係を生ずるに至つた。それと同時に、教育ある社會に對する彼の勢力は迅速に成長して行き、且つ頗る立派な働きをなした。千七百八十七年の饑饉には、彼は餓えたる農夫のために救濟會を組織した。——その時彼の生徒の人によつて、其自的のために、その全財産が彼の管理のものに置かれた。勿論教會と政府とは、共濟組合員によつて解せられてゐるものとして、クリスチヤニティーの普及の上に疑ひの眼を注いでゐた。モスコウの大僧正は『ノオヴィコフを彼の知れる者の中の最もよき基督教徒』であると證明したが、併し彼は政治的陰謀者であるとして告發された。

彼は捕縛された。そしてカザリンの個人的希望に従つて、彼を知れるすべての者が驚嘆したにもかゝらず、千七百九十二年に死門の宣言を受けた。併しこの宣告は執行されないうで、彼は十五年間シユツセルブルグの恐るべき堡壘に囚はれの身となり、往年イワン・アントノオヴィツチ大侯の入れられてゐた秘密の牢獄に投ぜられた。そこには彼と同じ共濟組合員のドクトル、バグリアーンスキイが、自ら進んで彼と共に禁錮されてゐた。彼はカザリン二世の死ぬまでそこに留まつた。千七百九十六年パウ

一世は位に即くや否や其日に彼を釋した。併しノオヴィコフは失意の人として堡壘を出て來た。そして既にその頃共濟組合の二三の支部等にて著しい傾向となつてゐた神秘主義の中へ全然落ち込んでしまつた。

基督教徒の神秘主義者等は幸福と言ふ事は出來ぬ。其一人なるラアブジン（一七六六年—一八一五年）は、腐敗といふ事に反對した著述によつて社會に大影響を及ぼしたが、同じく告發されて、其生涯を配流の中に終つた。併しながら神秘的基督教徒も、共濟組合員も（其支派の或るものはローゼンクロイツ教義を奉じた）、共に深い影響を露國に及ぼした。アレキサンダア一世が皇位に即くや、共濟組合員は其思想を擴張するに一層便宜を得た。而して農奴制は廢止しなければならぬといふ事、裁判制度も、全行政組織も、共に完全に改正しなければならぬといふ事、これ等の確信の生じたのは大部分は確かに彼等の活動の結果であつた。其外多數の有名なる人々が、ノオヴィコフの建てた同主義のモスコウ學院で教育を受けた。其中には歴史家のカラムジイン、大小説家の叔父なるツルゲエネフ兄弟、及び二三の優れたる政治家などがあつた。

同時代の政治論者ラディシエフ（一七四九年—一八〇二年）は、更に一層悲惨な最後を遂げた。彼は近習隊にて教育を受けたが、千七百六十六年に政府が教育完成の爲に獨逸へ送つた多數の青年の中に加は

つてゐた。彼はライプチツヒでヘラート及びプラツトナーの講義をきき、また非常に熱心に佛國哲學者を研究した。歸朝してから、彼は千七百九十年に『聖ペテルブルグよりモスコウへの旅行』といふ書物を著した。この著の思想は、スタルンの『感情旅行』から暗示を得たものらしく思はれる。この書に於て彼は旅行の印象と共に、種々の哲學上や道德上の議論、及び露國生活の縮圖などを巧みに織りまぜた。彼は特に農奴制の恐怖すべき事、行政上の惡組織、金錢にて裁判の左右せらるゝ事、其他の事を、實際生活上から確實の根據を捕へて非難し主張した。カザリン二世は、丁度佛蘭西革命の始まる前、殊に千七百八十九年の事件の後にあつたので、自分の若い時代の自由思想を恐怖すべきものと見るやうになつてゐたので、直ちに其書物を押收して破棄する事を命じた。女皇は著者を革命黨と認め、『プガチヨオフよりも悪い』と言つた。彼は敢て『フランクリンの是認を以て話し』そして佛蘭西思想に感染してゐた従つて女皇は自ら其書物に激烈な批評を加へ、求刑は實に茲に基づいたものであつた。ラヂイシエフは捕縛されて堡壘に禁錮されたが、後に東部西比利亞の最東部オレネクに移された。彼は千八百零一年に至つて漸く許された。併し其翌年、アレキサンダア一世が位に即いても、別に新改革の精神が動くらしくも見えなかつたので、彼は遂に自殺して死んで了つた。彼の著書は今日も尙ほ露西亞にては禁止されてゐる。千八百七十二年に出了た其新版は、直ちに沒收され破棄されて了つた。千八百八十八年に出版業

者が僅に百部だけを出版する事を許されたが、それは數人の科學者と或る高等官の間に分配されてしまつた。

十九世紀の始

以上述べ來つた所のものは、實に十九世紀に於ける露西亞文學の進化發展の要素であつた。過去五百年に亙る遅々たる仕事は、漸くにして驚嘆すべき、柔軟なる、さうして豊富なる機械——文學的の言葉を用意したのであつた。それによつてプウシキンは直ちに調子のなだらかな詩が作れるやうになり、またツルゲエネフは同様に流暢な散文を作り得たのであつた。國教不遵奉の殉教者アヴァクウムの自傳から、識者は直ちに露西亞人の用ゐてゐる口語が文學上の用語として價值のある事を推測する事が出來た。

トレチアコオフスキイは其拙ない詩によつて、殊にロモノオソフとデルジヤアヴィンとは其短詩によつて、佛蘭西及び波蘭から輸入した綴音的形式を根底から驅逐し、民謡その物によつて示されてゐる聲音的韻律的形式を建設した。ロモノオソフはまた通俗の學術語を作り、尙ほ多くの新語を作つて、羅甸語及び古代スラヴ語の構造は露西亞の精神に背き、且全く不必要のものである事を證明した。カザリン

二世の時代には、更に一步を進めて文章の中に耳なれてゐる日用語を取り入れ、農夫階級のものゝ言葉さへ借りて來た。ノオヴィコフは露西亞の哲學上の用語を創始した——尤も其底に横はる神秘主義の關係から幾分生硬であるとは云へ、それ以後數十年間の事實が示すやうに、抽象的の形而上學の論議には立派に採用された。創意ある大文學の要素は、かくして準備された。今や彼等はたゞ一層高き目的のため、それを用ふるところの生氣ある精神を要するばかりになつた。その天才がプウシキンであつた。併し彼に就て語る前に、歴史家にして小説家なるカラムヂインと、詩人ジユコオフスキイとを説かねばならぬ。彼等はこの兩時代を結合する連鎖であつた。

カラムヂイン（一七六六年—一八三六年）は其有名なる著書『露西亞の歴史』によつて、千八百十二年の大戦が國民生活の上になしたるところの仕事、文學に於てなした。彼は國民的自覺を喚起し、帝國の形成、國民的特色及び制度の進化等の形にて、國史の上に永久的の利益を創始した。彼は露西亞國の歴史家で、露西亞人の歴史家では無かつた。彼は朝廷の美德を歌ひ、支配者の智慧を歌ふ詩人で、多數の無名の國民によつて完成された仕事の觀察者では無かつた。彼は十五世紀の頃まで露西亞に勢力を持つてゐた聯邦主義の理解者では無かつた。況や露國人の生活に満ち互つてゐて、それが爲に無限の大陸にも打ち勝ち、また植民することも出來た自治の精神などを理解する人では無かつた。彼にとつては露

西亞の歴史は、スカンデナヴィアのヴァリンジアルの最初の出現から今日に至るまで、王國の規則正しいそして有機的な發展であつた。彼は主として君主の戰勝の場合に於ける行爲だとか國家の建設だとかいふ事ばかり記述した。併し偶然にも露國の著述家にとつては、彼の脚註それ自身が却て眞の歴史であつた。それらの脚註は露西亞史の起源に關する豊富な智識の鑛脈を含んでゐた。而してそれらの物は一般の讀者に、獨立した共和市から成つてゐる中世紀の露西亞の方が、本文に現はれてゐるものよりも遙に興味があるといふ事を暗示した。カラムヂインは一派の建設者では無かつたが、併し彼は露國に價值ある過去のあるといふ事を教へた。其上に彼の著述は一個の藝術上の著述であつた。それは非常に華やかなスタイルで書かれたもので、さういふ文章は一般の讀者には彼の歴史を讀む事によつて知られてゐた。従つて八卷より成る彼の歴史の初版——三千部——は二十五日の間に賣りきれてしまつた。

併しながらカラムヂインの影響は其歴史に限られてはゐなかつた。それは寧ろ彼の小説及び『一露國外遊者の手紙』などを通じた方が一層大きかつた。後者に於ては彼は歐洲思想、哲學、政治生活等の産物を齎して、それを廣く公衆の間に流布せしめ、或る時は政治生活及び社會生活の悲しむべき事實の平衡力として最も必要であつたところの人道的見解を廣く普及せしめ、また露國の智識生活と西歐のそれとの間に連鎖を建設せん事を企てた。カラムヂインの小説に就て見ると、彼は其中に感傷的なロマンチ

シズムの眞の追隨者として現はれてゐる。併しそれは當時の似而非古典派に對する反動として、正確に要求されたところのものであつた。彼の小説の一つなる『哀れなるリザ』（一七九二年）の中で、彼は貴族と戀に落ち、やがて男に捨てられて、最後に自ら池に溺れて死んだ不幸なる百姓娘を描いた。この百姓娘は確かに今日吾々の要求する寫實主義には満足を與へない。彼女は選ばれた言葉で話し、全然百姓娘では無かつた。併し總ての讀者は『哀れなるリザ』の不幸に泣いて、女主人公が溺れたと想像せらるゝ池は、モスコウのセンチメンタルな青年の巡禮の場所となつた。吾人が後年近代文學の中に見出す處の農奴制に對する勇ましき抗議は、斯の如くして既にカラムヂインの時から生れたのであつた。

ジユコオフスキイ（一七八三年—一八五二年）は文字の眞の意味に於てロマンチツクな詩人である。そして又眞の詩の崇拜者で、其向上力を十分に諒解して居つた。彼には創作は僅しか無い。主として翻譯家となつて、シラー、ウーランド、ヘルデル、バイロン、トマス・モリア其他の詩を、美くしい露西亞の詩に翻譯した。それからまたオドイツセイヤ、ナル、ラマヤンチなどの印度の詩、及び西斯拉ヴの歌なども翻譯した。之等の翻譯の美は如何なる他の國と雖も、獨逸と雖も斯く立派に外國の詩を譯し得るものではないと予は信ずる。乍併ジユコオフスキイは所謂翻譯家ではない。たゞ自分の性質と一致する詩人、または自ら好んで歌ふに適する詩をとつて翻譯したのである。知られざる悲しき回想、遠い國に向

つての憧憬、戀愛の苦惱、別離の悲哀等——は總て彼の胸に住み——彼の特殊な姿である。之等の物は彼の内部の自己を回想させた。故に吾人は彼の過激なロマンチズムなる事を目撃するが、それは當時の一般の人情的感情に訴へたものであつて、文壇の進歩發展には最初に必要なものである。ジユコオフスキイの詩は主として婦人に訴へたものである。吾人が後に述べるが如く、半世紀の後に露國婦人が其國家の一般發展に活動せる處を見れば、彼が先づ婦人に訴ふる處の多かつたのは無駄では無かつた。またジユコオフスキイは人間の性質の最もよい方面にも訴へた。乍併彼の詩に全く缺くる處のものがある。それは自由と民衆との感情に訴へる事である。それをなした者は『十二月黨』の詩人リリイエフである。

『十二月黨』

アレキサンダー一世は、祖母のカザリン二世と同じ徑路を執つて進んだ。彼は共和主義者のラ・ハルプに依つて教育せられ、全然自由主義者の君主として其治世を始め、露國に憲法を許さんとする用意までした。彼はそれを波蘭及び芬蘭に於て實施し、露本國に於てもそれに向つて第一步を踏み出した。併し彼は農奴制には敢て接觸しなかつた。そして次第に獨逸の神秘主義に影響せられ、自由思想を警戒する

やうになり、彼の意思を最も悪い保守方面に降伏せしむるに至つた。彼の治世の最後の十年乃至二十年間露國を支配した者はアラクチエーエフ將軍であつた——彼は残忍と軍國主義の狂人で、幼稚な阿諛と伴はれる宗教主義とによつて勢力を得た男であつた。

かゝる状態に對しては、當然其反動が起るべき筈であつた。殊にナポレオン戦争によつて多數の露西亞人が西歐羅巴と接觸した爲に、一層それが起らなければならぬ筈であつた。大會戦が屢々獨逸に於て行はれた。そして巴里が露國軍隊に占領せらるゝや、多くの士官はなほ佛蘭西の首都を支配してゐる自由思想に親炙した。それと同時に内に於てはノオヴィコフの努力が好果を生じ、また共濟組合員等は其活動を繼續した。アレキサンダー一世がクリューデナー夫人及び其他の獨逸神秘主義者等の感化に陥つて、總ての自由思想と闘はんが爲に、千八百十五年獨逸及び墺地利と神聖同盟を締結した時に、露西亞には多くの秘密結社が——主として陸軍士官の間に——專制政治の廢止に向ふ必要の階段として、自由思想を促進し、農奴制を廢止し、法律の上にてはすべての人が同等であるといふやうな思想を宣傳せんが爲に結ばれた。トルストイの『戦争と平和』を讀んだ者は、誰でも『ピエール』及び彼が初めて一人の老共濟會員に會つて、其男から與へられた印象とを記憶するであらう。『ピエール』は後年『十二月黨』として有名になつた一團の青年の眞の代表者である。『ピエール』と同じく此等の青年は人道思想に感染し、農奴制

を嫌惡し、憲法上の保證の制定を要求した。それと同時に彼等の或る者は（ペエステル、リリイエフ）王政に絶望して、古代露西亞の共和的聯邦政治に歸らん事を主張した。かくの如き目的のもとに、彼等は彼等の秘密結社を組織した。

この結黨が如何にして終つたかは知られてゐる。アレキサンダア一世が南方露西亞に於て突然死んだ後に、聖ペテルブルグに於て彼の後繼者と宣言せられた皇弟コンスタンチンに對する宣誓式が行はれた。併し數日の後首都に於て、コンスタンチンが帝位を辭し、其弟のニコラスが皇帝になると知れた時に、而して黨員等は彼此するうちに警察の手に渡さるべしと威嚇された事を知つた時に、彼等は彼等の綱領を公然と市街に發表して、一種の不正規的争闘に陥るより外に方法が無いといふ事を知つた。彼等は千八百二十五年十二月十四日（太陽曆二十六日）に、ペテルブルグの元老町に於てそれを實行した。二三の近衛聯隊の兵士が數百名之に従つた。反逆者の中五名はニコラス一世の爲に絞罪に處せられ、殘餘の者、即ち露國智識界の花たる殆ど一百人の青年は、遠く西比利へ流刑に處せられて、千八百五十六年まで其處に留まつた。教育ある立派な人物の少ない國に於て、斯の如き多數の最もよき代表者を其列外に引出し、それに沈黙を守らしむる如きは、其何を意味するか吾人の想像に苦しむ處である。一層文明の程度高き西歐諸國に於てさへ、斯くの如き多數の思想家乃至實行家が突然消えてしまつたならば、其進

歩發展に烈しい打撃を被るは云ふまでも無い事である。露西亞に於ても其結果は悲しむべきものであつた——併しニコラス一世の治世三十年間は、一層それが甚しく行はれた。如何なる自由思想の閃光でもそれが現はるゝや否や直ちに撲滅せられた。

『十二月黨』の中最も光彩ある文學上の代表者はリリエフ（一七九五年—一八一六年）で、ニコラス一世のために絞罪に處せられた五人の中の一人である。彼は立派な教育を受けて、千八百十四年には既に士官に成つてゐた。故に彼はプウシキンよりも數年の兄であつた。千八百十四年及び千八百十五年に二度巴里を訪ふたが、平和克復の後ペテルブルグの長官になつた。彼の初期の作物は、露國史上の主要人物を歌つた軍歌風のものであつた。其多くは單純な愛國적のものであつたが、併し中には既に自由に同感した詩もあつた。檢閲官は之等の詩の印刷を許さなかつたが、其手記本は全露西亞に流布した。其詩的價值は大なるものでは無いが、併しリリエフの次の詩『ヴォイナロオフスキイ』及び特に未完成の詩の或る斷片などは、彼の詩人としての天分の豊かなるを證してゐる。彼の親友プウシキンは、之等の詩を眞に湧き出したものであると批評した。『ヴォイナロオフスキイ』が未だ英譯されないのは頗る遺憾である。其内容は小露西亞がペートル一世の下に獨立を恢復せんとする苦闘を歌つたものである。露國皇帝が當時の小露西亞の支配者たる北方の大英雄チャールス十二世と苦闘してゐる時に、軍司令官マゼツバ

は其母國をして露國の羈範を脱せしめんが爲に、ペートル一世に反してチャールス十二世に加はらん事を計畫した。チャールス十二世は、既に歴史上に知らるゝ如く、ポルタワに於て敗戦し、マゼツパと共に土耳其に遁走した。ヴオイナロオフスキイは若き愛國者で、マゼツパの友達であつたが、露軍の捕虜になつて西比利に流された。其處で(ヤクウツク)彼は歴史家ミューラー及びリリエフに訪問され、其物語を獨逸の探檢者に物語つた。ヤクウツクに於ける西比利の自然の光景を以て此詩は初まつてゐる。小露西亞に於ける戦争の準備、戦争、チャールス十二世及びマゼツパの遁走、ヤクウツクに於けるヴオイナロオフスキイの苦悶、其妻の遠流地への訪問及び其の死等——總て之等の光景は美を極めてゐて、詩で書かれたにもかゝらず、其寫象の簡潔にして美くしい事には、プウシキンさへも感嘆の情を禁じ得なかつた程である。今や二三代の人々がこの詩を讀んだが、それは新らしい讀者に對して、同じく自由を愛し壓迫を厭ふの情を喚起せしめてゐる。

第二章

プウシキンとレエルモントフ

プウシキンとレエルモントフ

プウシキン、形式の美——プウシキンとシラー——彼の青年時代、流刑、晩年の經歷及び死——お伽噺——ルス
ラアンとルドミイラ——彼の抒情詩——「バイロニズム」——劇——イフゲエニイ・オニエギン——レエル
モントフ、プウシキンカレエルモントフか——彼の生涯——コウカサス——自然の詩——シエレーの影響
悪魔——ムチイリ——自由に對する愛——彼の死——散文家としてのプウシキン及びレエルモントフ——同時
代の他の詩人及び小説家。

プウシキン

プウシキンは英國の讀者にとつても全くの異人では無い。マサチウセツツ州ケンブリツデのクーリツ
ヂ教授は、露國作家を論じた價值ある評論の蒐集品を予の整理に托したが、予は其中で千八百三十二年
に、其後千八百四十五年に、プウシキンが英國に於て多少ファミリアな作家として語られ、而して其抒
情詩の或るものゝ翻譯が、雑誌に載せられてゐる事を發見した。後年になつてからプウシキンは露國そ
れ自身に於ても閑却されたが、外國に於ては一層それが甚しかつた。事實今日に至るまで、大詩人たる

に値ひする彼の作品の如何なる物も英譯されてゐない。然るにそれに反して佛蘭西では——ツルゲエネフ及び彼を人類の大詩人であると見たプロスペ・メリメエの爲に——獨逸に於けると同様に、彼の主要なる作品は立派に翻譯されて、文學者の間に知られてゐる。而して其ある物は感嘆すべき物である。乍然母國以外の大多數の讀者にとつては、どこでも彼はあまりよくは知られてゐない。

何故にプウシキンは西歐の讀者の人氣を得ないかといふに、其理由は容易に諒解する事が出来る。彼の抒情詩は全く獨特のものであつて、それは實に大詩人の特色を持つてゐる。彼の主要なる詩形の小説イフゲエニイ・オニエギンは、暢達輕快なスタイルで書かれて、繪畫的の叙述に富み、歐洲文學中無比の地位を占めてゐる。また露國の通俗物語を詩に書きなほしたものは、極めて面白い読み物である。併し彼の晩年の戯曲體の作物から離れて見ると、彼の作物には、ゲーテや、シラーや、シエレーや、バイロンや、ブラウニングや、ヴィクトル・ユーゴーや、またはバルビエ等の特色たる、思想の深さ及び向上といふ事が無い。形式の美しくしさや、表白法の巧さや、詩句や押韻の驅使の巧妙等は彼の主要なる點であるが——それは彼の思想の美では無い。而して吾人の詩に望む處は常に高きインスピレーションであつて、吾人をより良くするに力あるところの高尙なる理想である。プウシキンの詩を讀んで露國の讀者は絶えず次のやうに叫ばざるを得なくなる。『實に綺麗に書いてある！ これ以外に書く事は出来な

い。またこれ以外に書いてはならない。』この形式の美といふ點に於ては、プウシキンは如何なる大詩人にも劣らない。彼の表白法に於ては、最も無意味な叙述に於ても、日常生活の最も無意味な些事の描寫に於ても、また彼の表白した人間の感情の種々相に於ても、また彼の詩の中に含まれてゐる種々の場合に於ける戀愛のデリケートな表白に於ても、最後に、彼の書いた總ての著作の中に彼自身の個性を深く印刻した點に於ても——彼は確かに大詩人である。

プウシキンとシラーとの抒情詩を比較して見ると非常に興味がある。シラーの有する偉大性とか、其取扱つた材料の豊富とかいふ點を別にして、單に兩詩人の自分自身を歌つた詩を比較して見ると、讀者は直ちにシラーの人格は、思想の深さに於て、人生に對する哲學的理解を有する點に於て、遙かに秀れてゐるといふ事を感じ、プウシキンの方は、明るく、稍々汚れてゐて、寧ろ淺薄兒であるといふ事を感じずる。併しそれと同時にプウシキンの個性は其作品の上に、シラーに於けるそれよりも一層深く印刻されてゐる。プウシキンは潑刺たる生氣に満ちてゐて、彼自身の自個は彼の書いたあらゆる作物に反射してゐる。炎々たる焰に満ちてゐる人間の心臓は、彼の總ての詩の中に烈しく鼓動してゐる。この心臓がシラーよりも遙かに同感の少ない所以で、また讀者に一層切實に感ぜらるゝ所以である。其最もよい抒情詩に就て見るに、シラーはプウシキンが爲したよりも、感情のよりよき表白、またはより大なる表白の

變化等を發見してゐない。その點に於て、プウシキンは明かにゲーテと並び立つてゐる。

プウシキンは莫斯科のある貴族の家に生れた。彼は母方の血を受けて其血管の中に阿弗利加人の血を持つてゐる。母は美しくしい黒人で、ペートル一世に事へたニグロの孫娘であつた。父は當時の貴族の典型的代表者であつた。多くの財産を浪費し盡して、半分空家のやうな家で、どうにかうにかして常に宴會の中に生活してゐた。輕快な佛蘭西文學を愛好し、啓蒙哲學者から學んだばかりの議論を上下する事が好きで、當時莫斯科にゐた有名な文學者は、露西亞人と云はず佛蘭西人と云はず、出来る限り自分の家に伴つて行きなどした。

プウシキンの祖母及び其老乳母は、未來の詩人の幼年時代の最良の友であつた。彼はこの二人から露語を完全に征服する力を得た。殊に其乳母からは、彼は後に彼女と長い冬の夜を其田舎の家に過ごすのを常としたが、彼が警察の命令によつて其田舎の領地に住まねばならなくなつた時に、彼は彼女から露國の民俗物語に關する驚嘆すべき智識や、露西亞式表白法などを借りたので、それが彼の詩及び散文に驚くべき露西亞式特色を與へたのである。この二婦人から吾人はかくして近代の平易な、柔軟な露西亞語の創造といふ事を負ひ、それをプウシキンは吾が文學の中に導き入れたのであつた。

彼は聖彼得堡のツァールスコエ・セロ・ライシウムで教育された。そして學校を出る前に既に最も非凡

なる詩人として有名になつた。デルジャアヴィンは單なる後繼者以上のものとして彼を認め、ジユコオフスキイは彼の肖像に、『敗北せる教師より其生徒へ』と書いて贈つた。不幸にして彼の情熱的性質は、彼を文學上の交友及び其親友の一團から——十二月黨のプウシン、キユツヘルベツケル等——から引離して、懶惰無頼なる貴族の仲間に入らしめた。それらの人々の間で彼は其生活力を喧噪なる宴飲の中に費した。當時の淺薄空虚なる生活の一部は、彼自身それをイフゲエニイ・オニエエギンの中に歌つた。

六七年の後に現はれた政治青年等と聖彼得斯堡のペエトル一世の廣場で交際し始まるや、彼は獨裁政治及び農奴制に對する反逆者として、『自由の歌』及び最も烈しい革命思想をあらはした多くの小詩、それから時の君主に對する諷刺詩などを作つた。其結果千八百二十年に、僅に二十歳にして、彼は當時新たにベツサラビアに結合された小都市キシニョオフへ流された。其處で彼は最も異常なる生活を送り、終には放浪して歩くジプシーの仲間に加はりなどした。幸にして或る時彼はこの醜惡無趣味なる土地を去る事を許され、愉快な教育あるライエエフスキイの家族に加はつて、クリミヤ及コウカサスの方へ旅行した。この旅行から、彼は彼の最も美しい抒情詩の幾篇かを携へて歸つた。

千八百二十四年、彼はオデツサに於て彼自身全く不可能の事を計畫したので、（恐らく彼がバイロンに加はらんがために、希臘に遁れんとするだらうといふ事を怖れて）、政府は彼に命じて、中央露西亞に歸

り、プスコフにある彼の小領地ミハアイロフスコエに住まはしめた。そこで彼は其最もよい作品を書いた。千八百二十五年十二月十四日、彼得斯堡に於て暴動が起つた時には、プウシキンはミハアイロフスコエにゐた。若しもさうでなかつたならば、多くの十二月黨の友人と同じく、彼は確かに西比利に流されて其生涯を終つたに相違なかつた。彼は秘密警察によつて押收せらるゝ前に、總ての書類を悉く焼き捨てる事に成功した。

其後間もなく彼は聖彼得斯堡へ歸る事を許された。ニコラス一世が自ら彼の詩の檢閲官となつた。そして後にはプウシキンを侍從に任命した。哀れなるプウシキンは、かうして冬宮の小官吏として無益なる生活を送つたが、彼は元よりかゝる生活を嫌つた。帝室の貴族または官僚等は、勿論彼等の仲間に屬さないところの彼を、露國に於ける偉人として許す者は無かつた。従つてプウシキンの生活は、かういふ社會に居るがために、其自信に對する小刺戟に満ちてゐた。殊に彼は美しくしいが少しも彼の天才を理解しない一婦人と結婚してから一層不幸になつた。千八百三十七年、彼は其妻の事から決闘をした。そして殺された。其時彼は三十五歳であつた。

彼が學校を出てから間もなく書いた初期の作の一つに、『ルスラアンとルドミイラ』といふのがある。美しくしい詩で書いた一編のお伽噺である。此詩の主なる要素は次のやうな仙境から成つてゐる。其處に

は『海岸に一本の緑の櫛の樹が立つてゐて、一疋の惻口な猫が其櫛の周圍を廻つてゐる——猫はその木に黄金の鎖でつながれてゐる——そして左の方を廻る時には歌を歌ひ、右の方を廻る時には物語をすゐる。』それは女主人公ルドミイラの結婚の日である。長い披露の宴も遂に終つて、彼女は其夫と共に席を退く。其時突然天地が眞暗になつて、雷電鳴りはためき、其嵐の中にルドミイラの姿が消えて無くなつてしまふ。彼女は黒海岸より來た恐ろしい妖術者に奪ひ去られたのである——これは勿論民族物語の引喩で、南部露西亞の遊牧民が屢々侵入したのを云つたものである。扱、不幸なる花婿は、以前同じくルドミイラの求婚者であつた三人の若者と共に、馬に鞍を置き、消え去つた花嫁の搜索に出かける。この物語は彼等の經驗から出來てゐるので、感傷的な多くの事件や、非常に滑稽な挿話などに富んでゐる。かくて多くの冒険の後に、ルスラアンはルドミイラを取り返して、總ての民俗物語と同じやうに、あらゆる物が満足の結末を告げるのである。

これはプウシキンの最も若い頃の作であるが、其結果は實に凄まじいものであつた。古典主義、即ち其當時に勢力のあつた偽古典主義は、永久に打ち破られた。あらゆる人がこの詩を得ん事を欲し、あら

*大音楽家クリイシカはこの物語を最も美しいオペラ (Ruslan i Lyudmila) に組立て、其中に各ヒーローの性格に

従つて、露西亞、芬蘭、土耳其、及び東洋の音楽を織交せてゐる。

ゆる人がこの詩の全章句または一節などを暗記した。この物語によつて近代露西亞文學は——單純なる描寫の寫實的なる、寫像及び假話の謙讓なる、眞摯にしてまた幾分ユーモラスチックなる——は作られたのであつた。實際プウシキンがこの詩に於て得たよりも、更に一層の單純さを詩に得る事は何人も想像し得ぬ事である。併しこの詩の單純さを英國の讀者に知らせんが爲には、天分ある英詩人に依て立派な翻譯が出るまでは到底不可能である。そして十分に次のやうにいふ事が出来る。即ちこの詩は驚くべく音樂的であるが、著者は一行と雖も異常な言葉や廢れた言葉などを使つてはゐない——如何なる言葉を見ても、全く吾人が日常の會話に用ひてゐる言葉を使つてゐる。

この詩が發表せらるゝや否や、忽ち古典主義の陣營からプウシキンの上に大砲が放たれた。ダフネやクロー（いづれも希臘神話の女神）などを借り來つて詩を飾り、詩人は司祭のやうな態度で讀者に向つた當時にあつて、何等さういふ裝飾を借りずに、美くしい想像を以て其思想を表白した詩人の現はれたといふ事は、古典派がそれによつて如何に侮辱を感じたか想像するに難く無い。況んや誰でもが語るところの口語を以てそれを記し、幼兒にも分る言葉で叙述せるに於てをやである。彼の劍の一斷によつて、プウシキンは文學を奴隸状態に置いた束縛から解放した。

彼が其老乳母から聽いた物語は、單に『ルスラアンとルドミイラ』ばかりでは無く、他の一聯の通俗

物語の材料を彼に與へた。それらの物語を歌つてゐる詩は如何にも自然に出來てゐて、一語を發音すれば、直ちに他の語がつゞいて出てくる有様である。實にプウシキンが書いたより外には、如何なる具合にも言ふ事の出來ぬ程巧みに歌つてある。『物語といふものはかういふ風に書かれるのが本當では無いか？』とは當時露國全體に於ける問であつた。而して其答は確然たるものであつた。偽古典主義に對する戦ひは永久に勝利を得た。

表白の單純であることは、爾後のプウシキンの作物の特色であつた。彼が所謂高尚なる材料に就て書いた時にも、この特色は失はれなかつた。また彼の晩年の劇に於ける情熱的な又は哲學的な獨白に於ても、この特色は失はれなかつた。これ實にプウシキンを英譯するに困難を覺える理由である。何となれば、十九世紀の英國文學に於ては、ワーズワースのみが同じ單純さを以て書いた詩人である。併しワーズワースはこの單純さを重に愛すべき靜かな英國の風景の描寫を適用したが、プウシキンは同じ單純を以て人間生活を歌つた。彼の詩は散文に於けるが如くに流暢で、最も烈しい人間の情熱を描く時でも、技巧的な表白から解放されてゐた。彼は何事に就ても誇張し又はお芝居的にする事を蔑み、『物凄い悲劇役者が竹光の刀を振りまわす』といふ事を嫌ふ點に於て、純然たる露西亞人であつた。そして同時に書いた文學に於ても舞臺の上に於ても、單純の趣味及び感情の正直な表白といふ事を教へる點に於て大な

る貢献をなした。而して其例は本書の中に屢々あらはるゝであらう。

プウシキンの主なる力は其抒情詩の中にあつて、其抒情詩の重なる特色は戀愛であつた。理想と現實との間に横はる恐ろしき矛盾には、ゲーテや、バイロンや、ハイネのやうな大思想家も悩まされたが、併し彼にはそれは何でも無い事であつた。プウシキンは幾らか淺薄な性質の人であつた。西歐の詩人はまた露西亞人の持たない遺傳を持つてゐると言はなければならぬ。西歐の諸國はいづれも國家の大厄難の時期を通過し、其間に人類發展の大疑問が火刑柱にかけられた。政治的の大争闘は深い情熱を生じて其結果は悲劇的形勢に終つた。併し露西亞に於ては、十七世紀及び十八世紀中プガチヨオフの下に起つた大争闘及び宗教運動は、農民の間に爆發したので、教育ある階級はそれにあづからなかつた。露國詩人の智識的水平線はかくして必然的に制限せられた。併しながら人の心の中には常に何物かゞ住んでゐて、あらゆる人に何物かを訴へる。それは愛である。プウシキンはその抒情詩の中で、戀愛をさまざまの姿のもとに、非常に美しくしい形で、またさまざまの度合で以て、他の詩人の企て及ばないやうに巧みに表現した。其上に彼は屢々戀愛に都雅にして高尚なる表白を與へた。彼の戀愛に對する高い理解はつゞいて來る露西亞文學に深い印銘を残したが、それは恰もゲーテの彫琢されたる婦人のタイプが世界文學に大なる影響を残したのと同じである。プウシキンの後に、彼がなしたるよりも一層低い意味にて

戀愛を語る事は、他の露國詩人には到底不可能であつた。

露國ではプウシキンは屢々露西亞のバイロンとして語られた。乍然この評價は決して正しいといふ事は出來ない。彼は確かに其詩のある物に於てバイロンを摸倣したが、しかもその摸倣は、少くも『イフゲエニイ・オニエエギン』に於ては立派な獨創の作となつてゐる。彼は確かに西歐の社會に於ける套習的の生活に對するバイロンの烈しい反抗によつて深く印象されてゐた。従つて若し彼にして露西亞を去る事が出來さへしたならば、彼は恐らく希臘に行つてバイロンに加はつたであらうと想像される。

併し輕快な性質であつたが爲に、プウシキンには、バイロンの心を焼きつくしたところの因循な歐羅巴に對する嫌惡や輕蔑の深さを測り知る事も出來ねば、尙更其分前を持つ事も出來なかつた。プウシキンの『バイロニズム』は淺薄なものであつた。彼は『尊敬すべき』社會を輕視すべく用意はしてゐたが、バイロンを鼓舞したところの自由に對する熱望も、偽善に對する嫌惡も知らなかつた。

それからまたプウシキンの力は向上主義または自由鼓吹主義に向つては注がれなかつた。彼の快樂主義、佛國の亡命者より受けたる彼の教育、ペテルブルグの輕薄な貴族仲間に於ける彼の生活、これ等のものは、既に露國生活中に熟しつゝあつた大問題に彼を入れる事を妨げた。これ實に彼の短生涯の末期に及んで彼が最早讀者に觸れなくなつた所以である。それらの讀者は、ニコラス一世の軍隊が波蘭を破

碎した後に、露國の陸軍力を光榮と感じ出したのであつて、それは詩人には何の價值も無い事であつた。而して富める懶惰な紳士に對する聖ペテルブルグの冬期の生活の引力を描く事は、露西亞の生活を描く事ではなかつた。實に露西亞の生活にては、農奴制及び專制政治に對する恐怖が、次第次第に濃くなつて行つた。

プウシキンの眞の力は、數年間のうちに文學上の言葉を創造した點にある。さうして文學を其當時の印刷物に是非必要であるとされたお芝居的な、華麗な文體から全く自由にした事にある。彼は其驚くべき詩的創造の力に於て偉大であつた。日常生活の最も平凡な事物を捕へ來り、若しくは最も平凡な人間の最も平凡な感情を描き出して、讀者をその作中の人物と交通同感せしむる能力に於て偉大であつた。而して他方最も貧弱なる材料を組立て、それに生命を與へ、全歴史的時期を描き出す技倆に於て偉大であつた——かゝる創作の才にかけては、彼の後に出了者では僅かにトルストイが同じ範圍まで其力を伸ばしただけであつた。プウシキンの力は彼の根柢深い寫實主義の次に位すべきものであつた——その最もよき意味に解せらるゝ寫實主義は、彼によつて初めて露國に輸入されたので、その主義は、吾人の見る處を以てすれば、後年露西亞文學全體の特色となつたのである。而してそれは彼の傑作中に普遍せる廣い人道的感情の中に、彼の明るい生活を愛する點に於て、または彼の婦人に對する尊敬としてあら

れてゐる。形式の美に就て言ふ時は、彼の詩は二三度讀んで見れば『容易』に暗記する事が出来る。されば彼の詩は廣く全國の村落に行き渡つて、數百萬の農夫の子等に愛誦され、ツルゲーネフのやうな都雅な哲學的詩人と共に愛好されてゐる。

プウシキンは劇にも指を染めた。其晩年の作『ドン・ジュアン』及び『吝嗇な騎士』から判断し得るやうに、若しも其仕事をつゞけて行つたならば、彼は確かに大なる結果を得たに相違なかつた。彼の作『人魚』は不幸にして未完成の儘で残つたが、其劇的性質は、ダルミイズスキイがそれをオペラにした物からも判断する事が出来る。彼の史劇『ボリス・ゴヅノオフ』は、篡奪者デメトリウスの時代から材を取つたものであるが、そこ此處に非常に美しくしい光景を織り込み、其ある處は非常に面白くまたある處には戀愛と野心との非常にデリケートな解剖を含んでゐる。併しこの作は劇といふよりも寧ろ演劇史といふべきものである。『吝嗇な騎士』は成熟せる才能の異常なる力を現はし、疑もなくシエークスピアに匹敵し得る章句を含んでゐる。それからまた『ドン・ジュアン』には眞に西班牙の雰圍氣があらはれてゐて、他の如何なる文學に取扱はれてゐるよりも、遙によくドン・ジュアン型の人物をあらはし、第一流の劇たる總ての性質を持つてゐる。

彼の短生涯の終に向つてから、人事に對する深い理解のしるしが、プウシキンの作物に現はれて來た

彼は上流社會の生活に就ては十分に書いて了つた。そしてカザリン二世の治世中プガチヨオフの下に起つた農夫の大騷擾の歴史を書き始めた、時に彼はまた露國農夫階級の内部精神を理解し且つ感じ始めた。國民生活といふ事が彼にとつて前よりも遙かに廣い光景となつてあらはれて來た。併し彼の天分の發展が斯くの如き階段に開けて來た時に、彼の經歷は突如として終りを告げた。既に前に述べたやうに、彼は或る社交界の男と決闘して殺された。

プウシキンの作物中最も聲望のあるものは、詩形の小説『イフゲエニイ・オニエエギン』である。其形式に於てはそれはバイロンの『チャイルド・ハロルド』と多くの共通點を持つてゐるが、併し全然露西亞人のもので、都市及び田園に於ける露國貴族の生活描寫に於ては、恐らく露西亞文學中最良の露國生活の描寫を含んでゐる。音樂家チャイコフスキイはそれをオペラに作つて、露國の舞臺上に大成功を収めた。この小説の主人公オニエエギンは、當時の所謂交際社會に住める青年の模範的代表者である。彼は一部分佛蘭西の亡命者から、一部分獨逸の教師から、淺薄な教育を受け、『何かかにか』を知つてゐた。十九歳の時に彼は大財産の所有者となり——勿論それは農奴から成つてゐるが、併し彼は少しもそれに注意を拂はなかつた——そしてペテルブルグの『上流社會の生活』に巻き込まれた。彼の一日の生活は極めて遅く始まり、澤山の茶會の招待狀を讀む事、晚餐會、假裝舞踏會等が、其日常の仕事であつた。

彼は勿論劇場の訪問者であるが、そこでは彼は露國戯曲家の下手な演出よりも、寧ろ舞踊を選んだ。それからまた彼は可なり長い時間を流行の料理家に過ごした。夜になると舞踏會へ行くが、そこでは彼は幻滅の青年としての役割を演じ、人生に疲れ、自らバイロニズムのマントルの下に包まれてゐた。何等かの理由で彼は一夏を其領地に過すべく餘儀なくされたが、其時彼は其隣人に獨逸で教育を受け、獨逸ロマンチズムを奉ずる一人の青年詩人を持つてゐた。彼等は忽ち親友となり、そしてまた其隣に住む貴婦人の家族と知合になつた。その家族の頭即ち年寄りの母親は實に巧みに描かれてゐる。彼女の二人の娘タチアーナとオルガとは、其性質が非常に違つてゐる。オルガは全然無邪氣の娘で、たゞ生を喜ぶ心に満ち、何事に對しても疑問の起らないのを寧ろ苦しむといふ方である。青年詩人は彼女と狂ふばかりに戀に陥り、二人は結婚しようとしてゐる。タチアーナは詩人的の娘であるが、プウンキンは其驚くべき才能の力をすべて彼女の上に注ぎ、彼女を全く理想的の婦人として描いた。彼女は聰明であつて、考へ深く、常に自ら餘儀なくされてゐるところの無趣味の生活を呪つて、何かしら不明なる渴望に憧れてゐた。オニエエギンは最初から彼女に深い印象を與へてゐたので、彼女は彼と戀に陥つた。併し彼は都會の上流社會で既に幾度か戀の勝利を得て居り、且つ今は人生を嫌惡してゐるといふ假面をかぶつてゐるので、哀れな田舎娘の純眞の戀に何等の注意をも拂はなかつた。彼女は極めて卒直なそして情熱のこも

つてゐる言葉で、屢々彼女の戀を手紙に書き、または自ら告げなどしたけれども、若い紳士はたゞ彼女の無謀を戒めるより外には何の好意をも示さず、却て其傷にナイフを加へて大なる喜びを感ずるといふ風であつた。それと同時に、小さな田舎舞踏會に於て、オニエエギンは妙な氣分に動かされて、妹のオルガに向つて大膽な態度で媚を呈した。若い娘はこの憂鬱な英雄から注意を拂はれたのを喜ぶ風に見えたが、其結果詩人は大に憤慨して彼に決闘を申込んだ。眞の決闘家たる老退職士官がこの事件に關係した。オニエエギンは、佯つて濺んでゐるやうに見せかけて置いた田舎紳士等の彼に就て言ふところに十分注意し、その挑戦を承認して決闘を行つた。彼は詩人を殺して、其土地を去らねばならなかつた。幾年か過ぎて行つた。タチアーナは漸く心の病から恢復したので、或日オニエエギンの滞在してゐた家に行き、その老留守番と友達になつて、數ヶ月間其圖書室の書物を讀んで過ごした。併し人生は最早彼女には何等の引力も無かつた。彼女は母の熱心な懇望により、已むなくモスコウへ行つて、そこで或る老將軍と結婚した。この結婚は彼女をペテルブルグへ運び、其處で彼女は宮廷社會の花形役者となつた。かゝる境遇に於てオニエエギンは再び彼女に會つた。彼女は眼の前に見える立派な貴婦人を、昔のターニヤであとは容易に認め得なかつた。そこで彼は彼女に對して烈しい戀に陥つた。彼女は彼に何の注意をも拂はなかつた。彼の手紙はいつまでも酬ひられなかつた。とう／＼或る日の夕方、オニエエギンは

私かに彼女の家まで忍んで行つた。そこで彼は彼女が彼の手紙を読み、其眼に涙を湛へてゐるのを發見した。彼は彼女に向つてその戀を狂はしく打ちあげた。それに對してタチアーナはモノローグで答へたが、そのモノローグは非常に美しくしいものであつて、若しもタチアーナの言葉の感動すべき單純さだけでも移し得た英譯があるならば、而して其結果として其詩の美しくしさを移し得たものがあるならば、それを茲に引例する價值がある。一時代の露國婦人は、之等の詩を讀んで、そのモノローグに至る時は悉く泣いたものである。

『オニエエギンよ、私は其時は若かつた。思ふに今よりも美しくしかつた。そして私はあなたを戀した』
……併し田舎娘の戀はオニエエギンには何の珍らしさも無かつた。彼は少しも彼女に注意しなかつた：
『然らば何故に彼は今になつて一步々彼女に慕ひ寄るのか、何故にかくの如き注意を拂ふのか、それは今や彼女が富んでゐて且つ上流社會に屬してゐるためではないか。そして宮廷に於てもよい待遇を受けてゐる爲ではないか？』

『私がかゝる境遇に墮ちたのが、

至る處で人々に注意される事となり、

そしてあなたに嫉ましいと思はれるやうな名聲を傳へるに至つたのであらうか？』

彼女は更につゞけて歌ふ。

『オニエエギンよ、總ての之等の富や、

外見の輝かしい宮廷生活や、

總ての世間的な私の成功や、

立派な家や舞踏會や……

それ等の物は私にとつて無意義である——私は喜んで之等の檻褻や、
之等の假面や、

總ての光輝ある喧がしい生活などを、

小さな書棚と、荒れたる庭と、

風雨に曝されたる私達の見すほらしい家とのために棄てるだらう。

オニエエギンよ、そこで私は初めて

あなたに會つたのだ。

そしてまた私の村のお寺の墓のために、

そこには今や一本の十字架と繁れる樹立とが。

哀れな私の乳母の墓のほとりに立つてゐる。

* * * * *

其時なりせば總ての幸福は得られたであらうに！

幸福はすぐそばにあつたものを！」………

彼女はオニエエギンに其處から立ち去る事を懇願する。『私はあなたを愛する』と彼女は云ふ。

私が貴郎から隠れる本當の理由は何であるか、

私は最早他の人に身をまかせた。

私はその人の爲に眞實の人となつて生きたいと思ふ。

如何に多數の若い露西亞婦人がこの詩を繰返して讀んだ事だらう。そして自ら次のやうに言つた事だらう。『私は喜んで之等の檻褸や、すべての贅澤な生活の假面などを、小さな書棚のために、農夫等の中にまじる田園生活のために、そして私の村の老乳母の墓のために棄てるであらう。』と。如何に多くの婦人がそれを實行した事だらう！ 而して吾人はこれと同型の露國少女が、ツルゲエネフの小説に於て